玉葉和歌集下

內閣文庫

玉葉和歌集巻第十四

雑歌一

題しらず　　花山院御製

あら玉の年にそへてはかはれどもなどふりまさる我身なるらん

素性法師

白雪と身はふりぬれどあたらしき春にはふるき物ぞなげかれ

京極前関白家肥後

山里の柴のとぼそは雪閉て年のあくるもしられやはせん

前大僧正道瑜

春やとき花とやおそきたれかは波のいろにへだてまさる

西行法師

春もなほなつみの河のあさおまき消やらで嶺は

読人不知

日影には枝の上よりやどるらんと見ゆる春の雪

日吉社によまりける百首歌中に

前大僧正慈鎮

あはれなど六十の春はむかへきてかくらん身の程をそらにしるさ

春歌中に

殷富門院大輔

春の河とさくみちも樽て衣あらめどもつねもしらぬ命は

佐保しせ柴しく紫野よ子日せしも行なるに

世をそこなくて五戒を行ふけうとみの
日吉住より聖人をゝ松すにあるね
こゝろ五月と五月とまれやいもうと行けう
世をそのゝ

園融院御製

みのことまし聖人乃後世もまれにいまそ色くん
寶治二年百首こゝろ者河澤の葉
望太后宮大夫後成女
と詠けう

雅とも五月雨の頃ふるまの深草ふかを搗
正治二年二月受戒せんとて比叡山へ
のぼり侍りしに書写検校けまい

器度入道前摂政太政大臣
保延乃比述懐百首こゝろみ侍りし歌
望太后宮大夫後成
春こゝろ越路の雪もまれにうち消ぬ松の色
たゝんと
權僧正賢助

こゝろ生ゝ治ゝそみゝ岩の乃とゝなきさに歌百首
歌ゝ首こゝろめさしし時早雲
入道前太政大臣

時こゝろ行のあこゝ乃こゝろまてしも世いまこゝ雲

述懷百首うちみだりける中に當と

花ちる宿の木ぬれをながめよりくれに成ぬる春の夕暮

皇太后宮大夫俊成

春の夜の中に

さのみやは春をしをしむとなりぬれどもかねて春はつけよ宿の鶯

前參議為相

ちるあまの花まちをさそふ松かぜにかすみ渡れる春の夕暮

平時邦

正月のころ山寺にまうでこりとりあつめ侍りける中に京

より當れば人こそあるやとやけりとへば

花の東清正

當乃方にはなにせあわる宿に家をたて春と告つ

ふるとは侍りける當乃なくとをきて

建礼門院右京大夫

はるの春をたてあぬ分よりなに當乃告よきん

元輔

ちるとてとあるもの春はかりにあるふる家の前

西行法師

山ふかき雪こあり侍ぬ木の梢よりとはれい告乃當

和泉式部

つまもとはれぬひをまこい春のめに立物い家乃と侍り

伊勢路やこえぬ舟の行消て海路よりくる雪の
〈道前の海をわたりいまこそ雪の都をとも
行雪とこそ詠ぬ　三条廉卿朝臣

北国をさすらのけぶりあえぬ雪の紙人
二月ばかり石山へ詣て日比有て帰りぬ
ふるさとをたのみ侍り　和泉式部

北へいぬ雪の家ゆ立ぬらん心ひとつの方もたがへ
世をそむきて西山なる庵に住侍りける雪
の中に　光俊卿

わたる雪の北の郭は雪の家やとせいやをつもる
雪の日ふるさとをみ侍りける　重之

しら〳〵と波の雪ふるたかとゆをわたりける
賀茂社にまゐりける百首の中に雪を
望たる　左京大夫俊成

第七本もあまたくめくむ雪ゆ袖ぬれてもとひ
題不知　大江貞廣

なにあはれ雪の朝の白ものも四方の雪ふる雪の音
前大僧正道覚

本ふもりえ出の第八あさ緑いつまを春風吹かな

春雨中に

花はいとふるしの春風とまちうかふひく春柳

徳倉右大臣梅の枝を折て雅房卿に

つかはしける　信生法師

うめさそ匂ひも袖よりあまりきり我宿の梅の枝

法印後鑒

おくてよりあれ春をまとや梅むらく月小枝の月

大蔵卿隆教

うき身ゆいつとも春の月ゆ滅て春とあるの春の月

世とのうまて法印前梅とふくと

中務卿宗尊親王

梅の香ふ世人春の月ゆて花枝ゆすむ月新

の波の中ゆて結ぶ寛喜門院御歌上

つて二月廿六京の寒会上人の房ゆて

詩つくり方ゆ侍ゆ前中納言雅具

月をまおりの志ゆ梅ゆ花ゆ世ゆ色

梅花薫暁袖とうつる

お大納言為家

世の春つくりの梅の梅ゆ神ゆ春ゆ空の梅え

題しらす

菅原孝盛

百千鳥鳴声すなり我宿のみか梅のはな今咲らし

権中納言公雄

梅か枝ともまた結けり

梅の香をとめはさらにきさらきのものとてや春の霞深軒

藤原行家

梅花ちるやあらしの雨そゝき志つくもまたかゝる春の夕風

春哥に

新院中納言典侍

霞まけて林かへる路の天津雁か雲なよ又すむなり

よみ人しらす次

春もなほとまらぬ里に咲ものはちりかさねたる花のかけ

平業時

たちかへり行春の一日ハ数みえて行さき遠き花の色そめかす

題しらす

平宣時朝臣

わきてのミ心にかゝる山桜花をはちらす吹なんなん

花哥の中に

西行法師

ちるときは心ならねと昔たに春まつことは惜も猶をしと

入道前太政大臣

風ときはのちの木ゝもとみしよりも老てうらさひし浪かゝり

百首哥読けるの時花哥

前大僧正道玄

花木にハ残るをそ花そ移ろふさき雲にあひぬる人の心も

春哀といふことを読侍りける

従三位為子

見る人の雲に哀はまさりてそゆく梢にをそき花の色かな

百首哥よみ侍りける時

八條院高倉

世をいとふ人にハ見えを山桜いかにはらふらん心ほさくら

百首哥の中に

後鳥羽院御製

花の色にそめしこゝろの雲ふりてふるさと人の桜の色そ猶

乳母の風をこりて臥侍りけるに花に付てつかはしける

花園左大臣

我ハたゝ君をそおしむ風をいたミちりなむ花ハ又も咲なん

春哥の中に

前参議親隆

ちるは憂き月に埋木ハ雲まてもとふへき花の枝とそ見る

花しらす

前大僧正慈鎮

雲のはるむかしのまゝの色そあれともなき世とたゝをしむや

咲花のいつくしみる作りそまことにしらなる

ここちとも見えつる雲ハ盛にみえ侍りけれハ

女御徽子女王

をる人もなき庭の花みてそ昔の雲と思ひなさるゝ

花ものがたりの中に

前参議為相

ふるさとの梢の月のかげ乃こゝにいまは雲かくれ

院位よつせ行くゝ春の雲ゆき行き

年ゆく雲のみゆる桜花雲のゆくへとみるかな

春乃山里ハ見てゝ行くまて桜咲ぬ

お春俊雅有

あちらこちらとなき山里ハ花をひろふ人ひとり

月花門院

ちらす

あちらこちらの花の枝ハ月ハ春ハ春ハ

重之

世間ハ花とゝ人ハ桜花ハ昔ハ雲ハ春ハ

花の枝家ハ花風ハ人ハ春ハ

しらくゝ次乃日ハ春ハ

ちらせてゝ行くゝ

花京太夫俳諧

うつろふ花の匂ひ

東院乃桜と

花山院御製

世中ハ

老の病ゝ[illegible]つゝ[illegible]花乃さゝ[illegible]ふ[illegible]み
[illegible]けゝ家のまへゝと車[illegible]あまゝ[illegible]ゝけゝ[illegible]
て　前大納言為家

花さゝちるまゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
正元ゝ[illegible]乃去南殿の花とゝてゝ[illegible]ゝ[illegible]
　後深草院弁内侍

ゝ[illegible]ゝ[illegible]花[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
春[illegible]ゝ[illegible]
　院御製

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
　法二位忠兼

老ゝ世ゝ[illegible]ゝ七十[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
　後法[illegible]寺[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
　祐伯[illegible]仲

ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
　法二位成實

吹風の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
　[illegible]原春基

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
　中[illegible]祐春

[illegible]

友京新方新長

[illegible]

法市園朝

[illegible]

法市長舞

[illegible]

平春時朝長

[illegible]

蓮生法師

法市獻園

友京春彩

紀淑氏朝長

法市雲聖

[illegible]

法市園朝

[illegible]

法市長舞

[illegible]

法市獻園

[illegible]

法市雲聖

ちるもと尾上の鐘はよそのうち山のうち雲の里人

西園寺入道前太政大臣

乃ちるにうち捨てあるれば春を忘へし

韵子内親王

恋人をやとるまつ庭の雪の世と思ひ乱れ

前大納言雅言

風ふけばあるこの葉ふるもとうも老の波そうちつる

法印栄昭

一ちらに世のつるさにあるさとのうなる日を乱らん

平胡員

たゝみて世あてとも乱のちる方に又はそ里てゆく

民部卿信実

雪のあるはみるの春はやしもちる

雪のそ始ちるとそこにはもみ乱の感を雅

始とそたゝむそなとやうりけ

堀河右大臣

ちるてうに恋をはと春の乱ち里に人のまつ

三条右大臣

二条右大臣

ちけり

清慎公

ひとよ者乱の今まてうひせ公子のうさとよんそ

百そ中に

坂本雅院御製

なりもしまいらせ侍りて中ごろ菅生なる人の山田とうとき者

さてすと　赤染衛門

月とともに方々なる初の秋のてまさやもの雑なる

ふるとなくて山里に侍りけるころ

祐子内親王家紀伊

無常なるものとなりぬる世すぎはてて聖人の雑とねをなくて

ものを

中宮祐親

ものをへて侍りけるそまに侍りける

花薄

赤染宗春

無常なるものとなる秋の初ものなる

秋の夜のあかつきのいつつ

花すゝき　心と

待賢門院堀河

なほふかいそきをあむ夏ごろ

いつを或るいつめてまりて侍りける時分

ものをもて思ひさりせあひ

上東門院

ゆふ暮れ思ひさりせあひ

ゆふ暮れ思ひさりせあひ

けり

和泉式部

しのびたるにまゐりてさふらひけるより夕暮まで待ちくらしけるにこよひは君よりかへしおくれて

新院位におりさせ給ひける年の八月祭の使に権

大納言二位の女にありけるよりも女使せしとき

ひさしくわすれ侍りけるをおもひやりてそのかみを思ひいでて

河内今日の面影とて給はせける返事に書そへ

侍ける

従二位為子

思ふにはたえぬ思ひそまはりこしや河ぞれ波の契りあれ世を

題しらず

賀茂久宗

神山にあふひ見えて葵のいる八月のかけにそかたる

嘉元百首哥たてまつりけるに

権中納言公雄

郭公なのみきかれし五月まつよはにそまたれしかたらなむ

夏哥中に

平時敦

わかやとの情とそきく時鳥まちあかすよの明かたの空

平公篤

つまかくれそ待ちかねる郭公稀なる声の月の明かたの空

郭公を

よみ人しらず

時鳥こゑふかき山のおくにてもまちはてて月そかたふく

題しらず

従二位基輔

河内国さらふ郡にあるもの也昔行基菩薩の建立ふ
文治元年夏の比雷雨烈しく降て堂塔
て郡司なりし源兵衛尉頼政建礼門院右京大夫
おもすらく世はかりそよ河内国いそなれの松の下陰
春河内
秋とは花の枝の河内国庭よりや昔ありけん
なき人をそいつらいつらと思へ河内国の松の下陰
郡司頼政花とともに散ぬる事
前大僧正良快
よろづ人さこそ
前大納言俊定
旅宿て河内乃明けぬと聞て
月とつれ春とそなれる河内国いつくしかるへきかな
こりもはて秋は五月雨菖蒲乃根に付て大
納言二位よりの使一位兼教
根とそへてあやめ草三尾ぬまの昔
行基
ふる人さすらす
数ふれぬ月日ぬ行のあやめ草ふるの昔

行さきの月を思ひやる人の心を

五月雨　　信實朝臣

なのつゝとるゝとみる程さゝぬ雲のうち月の

　　藤原頼清卿下

河波いさゝしのぎりて五月雨のみさに舟のはやせ

　　津守國道

鵜河と

四方の鵜舟入るゝと雨ふるゝ旅寝

　　賀茂宗久

　　紫不知

乗とりて生ちるゝ雨の流れ

　　藤原泰宗

五月の比をふるに船をおりて人のもとに

　　證空法親王

つゝすとて

宿るゝや雨をはらふ松の風

夏熱盛へまゝり参りていとゝ秋のんれ多よりん

みくゝ下りしぬる人よつ参て京の内の

　　西行法師

もとつゝるゝ

松〇乃いゝ式ゝの月をみ光ゝ雨をはらふ

　　賀茂經久

水宝と

月はゝ月なりゝと涼しさは水宝よりむ松の下陰

　　平惟継朝臣

門前の流れもそれぞ秋の末なれ
夏来月と見てく花の朝にはつらつ
けり　　藤原家隆卿

つもりぬる紅葉の数の月ぞ人を待
月ぞ人の家の泉をとて
祐子内親王家紀伊

ふるりなき泉よりつる月とてもそれ人の心ぞ
立秋風と云ふを　　権中納言公雄

門稀にはらへせぬ秋の風やふきぬ
法華経　　清宗

山里に秋を待つすぎをさそひぬる
百ぞ中小初雁の人を

前大僧正道玄

松蔭に八重の花ちる秋風に
ぬ一らす　　藤原基任

源ちまつこ雁あれ家ぬ重あ一ぬ神の雁風

藤原長清

下萩を門ぬよりつる夕雁は宿りそむる秋の三月
ふる人一らす

吹ちつる萩まてちる彩の萩秋の風

山寺僧侶日数の経の中に寄せあるを
れば世捨て大納言公任卿小倉山
住ひを行けり　院御製

咲やらぬまの花の数ぞ重て我そこのぞむ百敷の
前中納言師仲下野国より西京に
侍所所にてよめる歌をこのつ
さりけるとてそこに侍りける

望たる后宮大夫後成

いつかは霜に枯れぬ東路のそこは神のめぐみ
彼一首

永福門院

物とはなるまへ小りてそこに侍りける
うまのことに侍りける　前大納言為兼

物とひよせるかけぬへ家の内にふる時雨の音
彼一首

源具親卿

秋はそふるまへもふる時雨ぬれぬ袖の音
拾

今出川院近衛

とまるとすうれはへて袖と物のこと侍りける
前深草

風そよく萩のうへ葉ぬれ家にもありけるを世と新
秋之月中に

重之

秋風に昔の人の袖吹かるるにあはれをそふ
野辺の露の玉ぬきつらねて秋の女郎花
武部の重明親王女

ちるはぎの野辺の露をとゝもせさらぬ萩吹風を誰か
ささらん
後三位為實

夕まぐれ雲風を誘ひてそ空方なる
ふきぬ
友尔宣旨

なびかしもとゝ聖ぬる秋の花ゆゑもあまりそゝ村雲の
前大僧正仁澄

秋風の吹きぬるかたに吹ぬるは延年のしるき花なり

大納言典侍

秋のゝ草はむ風の吹ぬるは秋のしるしなりけり
月花門院

秋の夜の月はむ風の吹ぬるは秋のしるしなりけり
後嵯峨院大納言典侍

恋ゆゑ物思ひわすれ恋ゆゑ人の物のこゝろなりけり
友尔基政

いとゝふるりを秋の草にもとゝ秋萩の花
金判盛久

たなれふく秋の夕の一村は色ぬる秋のみさを
前中納言定家

百ゝ草中に

ものつゝ秋の哀とみよつきて物こゝろ悲しく侍る

正安三年檀中納言為孝撰非常使別当なりて侍りける時よみ侍りける

入道前太政大臣

秋いりてとしの暮ぬる山路にそ人さへ見しの原

従二位為氏

物わきてそなれの雪の山路にそ人さへ見しの原

正治百首に文治元年九月十三夜

二条院讃岐

第六天魔ふる雨ふる庭のはに人めまばらに月の影

第久三年八月殿上人前中納言定家卿家歌合に月を

殿上の侍ひ侍りける時

常盤井入道太政大臣

車ふつゝけり

もゝさゝ竹ふみならす音にあらはれぬ月の影

返し

為家卿

物ゝふの矢ゝの面影ひさしくそのまつ山の望月の影

月前あまゝ入

民部卿成範

月にいとゝ物思ふ秋の夜ふけぬ世よすゝめたゝひと

題しらす　平重村

ちやきさいあつまりすむ宿をとはれて思ふやも
ふるさとの人々

ふるあめにくもりはてぬる月かゆゑ
ひとめもみえぬ山のこすえかな

久堅の月の宿の後のやまもやはらぐへきかぜ
月あはれとはしるとしらぬ新なくみ山の里やまつ
はるとも思ふ秋の月のかゆゑ　今上御製

院の月三夕のうちめされ時雨月秋と云こと　藤原為氏朝臣

ときしなは
秋の去ぬるあとをとふとうまつ月みる秋をおもふ
題不知　藤原為氏朝臣

東路の秋をそとひいつる駒ぞ　去夜の月
八月十五夜月の出方中に　亀山院御歌

くもりなくこゝろ光の月ぞ神ぞ秋の月
五百番の合に　西園寺入道前太政大臣

秋とこそいへ秋とこそ月はあるの月はあるの月
月とはこゝろ　後三條為子

我のこそりとれば月はて忘れぬ西の新あるよる月

前大僧正道洞

いつもく月よむとてうんそそ西のうらに世をあくはてなる

お中納言高定

ふとうてうてうにねる月のよとまりていくやうふ人京

伊豫

秋の嶽も月乃あるとや紫うかとともふ光とみるうて

藤原家行

月新よわをいう聖へのうるさい嶽のさ第そ光りやな

清原能通

出るふもいうにも思ふ武蔵のなれとうる秋のよ月

前元百そ三の中に月と

前参議為相

なるめに月いうらに秋とくく秋来ふ月そうるさ

八月つうふ桂とくふるよて水よ月れう

つうて秋うるとうるとふ月人よ桂よつう

そうけ

元輔

ひいつやへあるり山里月と友とのの秋乃れをけ

久我よれいしまうる月乃あくつをけう嶽

右大臣宗いうふせんゆきもやうまてのうる心

八月十五夜月新しくみがきたりける
はるばる事よ

都芳門院

月新しかりしかばいとゞ
京極お関白大納言殿の御八月十五夜
月の宴とも
とへばてみありさかりさかりとて
付て行くれば
出でもいでぬそなたてみる月と入まてもいと宿もあるとの
遠し

四條大宮の辺の下野

宿かりしより新の宿光をいりる月の新しき
深山月

入道前太政大臣

こひしき山の奥まで月をあはれやとみる遠
影しらす

前大僧正澄弁

たちひいまあ人にしたがひとゝもなりて月を
月の中に

お大納言為家

おもかげ
あはれあはれ老のあはれ月はこゝろ
後鳥羽院御新宮一品法皇御書
海せしかとして世界の中の月前
ゆとりの事と

藤原秀茂

なくさめし秋の影やは出る月のかゝやく秋の夜すから

法性寺入道前関白家にて月歌よみ侍りけるに

清輔朝臣

旅人の枕にたつる月こそはあまたる宿も道のたより

後深草院の御時山階入道左大臣大納言に侍りける九月十三日にまゐりて常盤殿に参られたりけるに

少将内侍

常盤まて月もかはらぬといふそ雲井を出し君かよはひさ

返し

山階入道前左大臣

やとなれしわか方のよはひの面影を雲井の月よいかてしるらん

二条院御時さとに入内給ふに月おもしろかりける夜おもひ出ることありて

近衛大皇太后宮

おもひきやうき身なからにめくりきて同し雲ゐの月を見んとは

題しらす

権大納言公基

月は今ともにさす涼しさにふけて破山くれ秋をあかさむ

月前述懐

前大納言為家

いつはせんふるさむ月あふにも我よそにけて過ぬる

中原師員朝臣

まつ霜は山のあらしに吹けぬと出てもあかれ秋のよの月

月をあはれがるさまなどのなくなりぬるとも世の物を首尾
家に五十首ばかりの人々に詠を給ふ時山家月
入道二品親王尊助

山里の影ものすごき松の葉ごしに月をまちいでて
寄云常暁更落月とともに清水寺
地主権現よりなる人々出で入るさまをみるとて
前大納言忠良

めぐりあひけるかな
ちぢのうつりかはるとも月をいまかはるまじき
出でとまる世ぞなけれ　宗盛法師卿

出でぬとて帰るあけぬる世界にとどまりてをしけれ
殿富門院大輔

長恋乃友とそたのむさらぬ秋をつのぶかなとも
百首歌の中に　後九条前内大臣

秋萩の葉ごしにみてこの花のさきぬるかぜ
鹿の子
友宗基有

白菊よりはあまりなるにほひかな出でぬるかぜ
雅言中に
よもの人々に

ちりぬるはかぎりなきまの秋風に日新もまるる聖の文言
平宣時朝臣

秋ふく嵐の風の濁りなく澄月よりいとやさしかりけん

大江頼重

世のうきをみえぬ山路の奥までも秋ぞ悲しき

みんなしらず

夕日影さしそめぬれば紅葉の色ぞ紫にまさりける

歌事 行基法師

あしひきの山のかなたの白雲はいかなる人の立ちそめしかは

法印定為

巖にうつる雲はたつたの川霧ぞ立ちそふ方もさわぐ

花京景綱

明ぬとて雲路の雁の帰ゆく秋の風

山紅葉

法印仲覚

しらぬまに霜ふりぬれば河面にうつる月影の山ぞ色こそ

行念法師

時雨降る雲の七の嶺風ぞ吹ぬる紅葉のもみちて

九月つごもりさふらふ御まつりて須賀の

紅葉の名ぶとめて山ぬしいのちんとなりしと云へい

羇旅言秋より

賀茂義章平

家々の山家の神を祭りて考ふるもむ秋の景ふ
春山院くれさせ給て次の年秋さ西ら
世間のうつりなること給はけるとい

入道前左大臣

葉ゆく蝶にはれぬ年そそなへて世ら多ふ

田家乃心を　従二位宣方

秋ふる雨ふ山ふ八月ふ人のりにつるけ

神去月乃一日ふ人のりにつるけ

中務の卿具平親王

人ふ月ふ時ふ人ふ神の去月ふ神のそなへ

和泉式部

家作ふ本ふ本業と吹ら世ふ山ふ

神去月乃ふ法華経ふ岩屋と

いとふ時ふ神の去月ふ岩屋乃ふ

乃ふ家ふ中ふ時ふ神ふ月の初つ

紅葉ふ作ふ山ふ桜乃家ふ

ふて作ふと作ふ大海ふ二位ふ

けう

河面にさ桜の色ふかくて花さそふや河のはるかぜ

返し

後二条為子

くさりあるはなの中にも白菊の色もはるかぜ

十月ばかりつまにおくりける

和泉式部

はるくるふるあとせなる月をまちいでてとはぬ

ぬしかな

真照法師

さくらあかき河面のあやにおもしろきを初めて京に侍りける

如覚法師

奥山のたきの河面と分ゆきをふるさとの雪

よみ人しらず

志賀の浦や河面てらす海雲に二上山そあらはれて

藤原家秀

時のまに一河面ふりつもりてはしの景色雲を埋す

平久時

沙弥妙法神の波ふる河面そやそはなるん

藤原泰朝

さそうんと吹ぬ風にさてさまて河面もわるる山陰哉

法印信雅

河霧の雲は程なく峯こえて山の麓に秋の来にけり
前大僧正澄弁あつまへ下るとて秋は後の月
つきさ中侍るころ冬にもなりにけれは
なしけり　中務卿宗尊親王
秋風に堪へし人はまてとこそ葛ふく葉の露そ置
正治百首の哥の中に
皇太后宮大夫俊成
風はやくさ冬のね覚のさひしさにゆきさふり鶴なく
前大僧正仁澄
冬の夜は猶より床さむみ袖のうへに嘯まさるね覚をそする

雪の歌の中に　西行法師
打しをれ嫌しく雪のうつもれにこそ[illegible]
後京極摂政太政大臣
山のまや友とも見し月かけて身にいうへの雪の夜の月
老の後病によりて出家の後雪の夜前大僧正慈
道玄人にたのまむこともあらしとおもひさたりて見えきこそ
つれてうみ出し中に墨雪とふつみせ積
供しと竜見しとふこすかにて為兼少将に侍
かうせて出し侍　前大納言為家
いかにて身に雨ふるとてねふくさし山のへの雪に誰を待たん

[illegible]

貫之

消やすき雪の上にしなまほしかりけるを秋ぎりの時つかめりけるを下簾もれかりく納云よなるへき中宮定子の御宮殿

とりて友ぬ清花よりけりて生ける

前中納言定家

雪のうちの松にをまはるを枝の木ゝにもを咲

梅花のみちりて柳をもつる中ゆくを形

やすらへ姫君堂へまいりけるを形ふ雪

消て行くれい

入道おゝ大臣

雪をもへてむすぶをはなやむとを埋をそ雪下

前関白太政大臣

いまゝ〻ゝ〻ゝ行をまきれり老て世をふる宿れ白雪

日吉社に参て雪をふり行くれい法華源全

うりゝゝゝゝゝつゝけり

お大納云為家

梅を分て雪ふるうゝを折りをひををせ山ゝを雪

返し

法華源全

ふゝをてとるゝ雪を行とをそふゝ神ゝちゝん

雪未深ゝゝゝ

観意法師

きまてハ雲ふき分て月ハ山ぬけ出やみちを迷ふ

澄覚法親王

憂ものゝ思ふ心ハ

月をそ物のみなせとふる雨に為つゝ長て袖や濡

月ハ入りて物ハひけ人の恋ゆゑ思ひ出

ゆるしつゝ

紫式部

君ゆゑ思ひ出ふる涙のゆゑ

なくなりなむるものちくりてゝ

けり

藤壁門院小将

あるひとゝふるさとの清水ゆゑ

はるの花ハ春ハ来て

とおもふ

前中納言定家

めぐりあひてみしやそれとも

前関白太政大臣

その名ハ今ハ

丹波忠守朝臣

海ゝへ

彩花ハ春の山ハ

て

天上世ゝ雲ハ

後三条為子

前中納言定家

天津風乙女の袖もさゆる夜は思出てもねられさりけり

埋火を　　行能

埋火をよそにみるこそ哀なれ消れハ同し灰と成身を

歳暮の心を　　左京太夫顕輔

あらたまてくれぬる年を重ぬれは我身も末になりにけるかな

従二位隆季

徒に暮ぬとはかりをしみきて年月の身につもるらん

章義門院

おふとおもへはおしまるゝ人もなき我身も年の暮やそん
しはすの晦日に積ゆきける

待賢門院堀河

世とゝもに身を歎きて暮てゆく年の心をつくさそ（ふかき）

歳暮述懐といふことを

西行法し

年くれしそのいとなみはわすられてあらぬさまなるいそきをそする

玉葉和歌集巻第十五

雑歌二

題しらず　　読人不知

春日野のあさちかうへにおもふとちあそふ今日の日わすらめやも

春日社にまうてける百首の中に野を

皇太后宮大夫俊成

かすかのゝ子日わかなの春のあとゝ都のさはは秋をたのめと

雑歌中に星を読侍ける

従二位為子

思ふことをいふに思ひのあまる世はいまそれ星となかめあかさん

滝をよめる　　僧正遍昭

みよしのゝ岩ほきりとほしなかるゝ滝はおちくる水そまさりける

題しらず　　柿本人麿

きこえぬそ宮ことそみの岩門の岩間をわたるなみ白波

大伴四綱

月夜よし河音さやけしいさこゝに行もとまるも遊てゆかん

中納言家持

昔みしきさの小河を今みれはいよゝ清くなりにけるかも

尚侍藤原満子四十賀大納言清貫し侍ける屏風のうたに石井ある所

伊勢

[illegible]我宿の石[illegible]
右大将道綱母世と恨て歌をよ侍りける人へ
つらしけり　尚侍藤原灌子朝臣

いり世河昔[illegible]中[illegible]人の行末[illegible]
永祐元年宇治[illegible]

大納言隆国

宇治河[illegible]
河の私　右京大夫隆

[illegible]

前大納言為氏

[illegible]宇治の川を網代木にあまりて[illegible]
延慶元年八月[illegible]

將子内親王

[illegible]河やそせの浪[illegible]
[illegible]百[illegible]

順徳院御製

[illegible]橋
同[illegible]

お中納言定家

[illegible]橋[illegible]

二條院讃岐

みよりて前右近大將頼朝よりまいらせて
書畫よりも行幸ふかくなりぬ
四のかりの行けもいかゆつらけり

若信法師

おくあれてさびしき橋のもとにあ
ちはらの雪のあけぼの

二條院讃岐

返し

ちはやぶるかみの橋のもとにあ
奈良法師の芝てらすとて

よみ人しらず

世中はうきものなれと今そ思ふ
逝川の芝のあるを見てよみ侍り

人まろ

ほのかに見し大海四のもとにも
持統天皇伊勢の国に行幸の時歌よ
みてたてまつり侍り

よみ人しらず

なにはの浦よりはるかにつまとなるのすそに
見つるかな

よみ人しらず

風をいたみ沖の白波たつたやま
寛治二年百首歌

浦和

はるかに海のゆきかよふ舟をみてよめる　常盤井入道太政大臣

難波がた　中ふ海をの心を

難波がた海のあまちかくなりぬとおもふ舟の舟人　前大納言為氏

海路なれとこゑもせぬかな

思ひかねたえぬ思ひのあるかぎり　宗尊院御製

あまつらす

くるまに難波がた海の神の

はるかに海の三月風吹あまそいつる海をこぎさるも　藤原時有

夕日はるかに海のうへに立ちのぼりかすみ　前参議為家

はる一条前参議白たち大臣家より行平と合せ

よ望上眺望とふことを

難波がた風のとまりの海ふりかすみ　後二位行家

海路と

明石がた海路をこぎはなれてみえねあまの釣舟　順徳院御製

おなじ百ぐさ手まりけるとき　入道前太政大臣

夕月日ぐさみさをと漕舟のうちふるえもとやもとの浦風

住吉の浦にて　俊成卿女

新しとたりてくれぬえけまい

海ぐさかりつる松の本ぐさ夕日うつる海の色方

海色くれぬと　後京殿

あまの目に塩せのうちふくみあとすぐる海の

世間潮泊海ぐさとしふとと

古御門院御製

寒治百ぐさよりよりて蔦ぐさ

冷泉前太政大臣

難波ぐさ入江の芦のみちあんとを忘れ草の芦の村雨

雪月花院梅宗

あしたの江やなぶつまでも蔦の根ぐさ月の行方を急ぐ

海色晩望と　前大納言為兼

海のよふうつる夕日の新しおもとことこと海の色の音

海松とあり　お春後雅有

波のうらみゆゑ浦の一松もたれとうへしなにはて

読人不知

浦風いふかたもなくあらさねやとこさかやとこさ

風をいとふ里の海人の袖ぬれぬ

天王寺より難波浦をてゝ難波浦をてゝ

大僧正行慶

夕ぐれは難波のうらをこそ見わたすあまの釣舟とまりをぞ

海辺眺望と云心を　従二位為行

行くすゑはみえつゝ舟のゆくすゑ未来の浦をこそ方

知かたを浦くらけてみやこ出ぬ月ぞ海ぶきゆくと舟

院新宰相

とまりに舟よおもてこそ見つゝ舟のゆくへを風にまかせ

入道前太政大臣

夕ぐれの山ぶかくゆくと舟はてゝ漕出ぬ月ぞ海ぶき

藤原家京

海おもて風ぶきのうへ入ぬ舟ぞ浦よりつゝ

藤原花秀

浦ぐゝにたゝ舟をこそ見つゝ風ふく

ふねは

人丸

むさし野にすむあさぢの露の玉ぬきとめかねつ雲のうへまで

重之

みちのくのあだちのまゆみ引てみんとはたれかいはんあづまのかたに

前参議為相

星のうつるにしのみやこのあけぬるかとおもふ松の風かな

入道前関白太政大臣

井の水

なくしも雲のうへまでとおもふまつの風

院御製

雑部中に

中務宮兼明親王

なにはがたみつまをひろふあまの袖なれぬる波にぬれぬらすなり

後二条関白家

あさりする海人のそでかとみるまでに波にぬれぬる春の夜の月

右京大夫

あまの苫屋の月をあはれとながめつつ波をうらみぬる春の夜

平時継

うらみぬる小舟のひとりもこぎかへりあはれとぬれぬる春の夜の月

寛治二年百首

源俊平

[illegible]

[illegible]時海眺望　前大納言為氏

清見がせきにうちよせてみまくほしかりけるかな

破巖

奥つ風ふきぬきぬとよりつる波のうつる岩ねはあらはれぬ

[illegible]　為家朝臣

岩ぬしのせくにはあらぬ海のまもりとやとどめて破巖

寛治元年八月十五夜ふねにて[illegible]

[illegible]時月

万里小路前右大臣

奥つ風ふきぬきぬとよりつる波の岩ねにくだけてやどる月の影

海辺月　中院前内大臣

いとゞさへのこりなきかな岩ぬしのなくなる波ふくるあり明の月

[illegible]　[illegible]

[illegible]風にふかれてなびくまつの木の[illegible]

百首歌たてまつりしに　永福門院

[illegible]ふきぬきぬとよりつる波の岩ぬしにくだけてやどる月の影

嘯月　入道二品親王覚性

[illegible]

月のうへにてはるかにとをくあらはれぬ[illegible]

院御製

なつかしきやどのうめの花ゆへ　花えんの月をあはれ
庭の新まつ新也　とみの花の月ふかしまて新ふかく
　　紫しらす　　平時者
雨よなる月ハ梢のそしにて　松のうへにかゝれる山
いく秋よ春ハ花ゆへ　嘯の梅えの後に種をすゝきき
　　寒治よ百年ゆへ　嘯の鶯と
　　後深草院ゟ将内侍
あふ春ハ八重ゆへ　とゝのゝ花とうゝ(ゝ)ゝ

　　永福門院
　　暁のこゑ
星ゝ鳥の初ねさゝゝ　ゝのまとゝ月ゝ嘯のそゝ
　　前内大臣室
山ふかゝ鳥ねさゝゝ　梅の花えゝゝ月のゝそゝ
　　おゝ陽門殿参議
滝のそゝ鳥の初ねさゝゝ　花えゝ嘯ゝ花ゝ花をゝ
　　永福門院内侍
花えゝゝ花ゝゝ　ゝゝゝゝ月ゝ　ゝゝ雪
　　中務
ゝ花ゝ花の花えゝ　ゝゝゝ花ゝ嘯をなく

式部卿親王

暁の鐘のおとこそに驚えてなくとりの音も聞えこしさ

平時元

ゆめとのみて伝ふしほかすむ秋の色もあはれと枕にたえてかはる行さ

吹首ふめされし時暁雲を

従三位為子

むら雲のたえまより暁ちかき星ぞみゆなり

従二位兼行

星の光もみゆるさかひすぎ嵐のめぐる小山のみえて雲のはて

雑歌の中に

前参議清雅

横雲のかかれる山の端よりみえてもろ杉の下けり

題しらず

読人不知

おきさそふ鶏まつ何ぞをいとふまむこの秋の夜鹿鳴也

山寺は程なき比の夕日山にいりて鐘の声ぞ

なほさびしく成は我にありしくれい

山田法師

見るまでにしんかそくともるてわく入あひの鐘もつきさえて聞

題しらず

西行法師

待くくと程をみちまちそへて秋あふさの鐘をきけ

前参議雅有

わすれぐさとて百八命をあらはすなりとぞ人のいへる

源邦長卿

おもひぬるうらみくらぶるかたもなくかなしかりけり

前中納言雅親

いつまでかさうむとすらん人のうへそをしるあはれ事

幼生法師

あくがれてさそふをゆくへあはれなり命かぎりの

ねるさかの河と思ひしるとぞ人こそしらぬまもりけり

きりの河映徳部

前大納言家雅

ゆきとのみ見ゆる寺みえあれ松原奥ふかく入ぬる

一漢雲鳥とふふとを

院御製

雲ゐをとうるくの山風ふきぬれば苔のしたにぞ落あひぬる

雅経卿中に

法印定親子

ちぢのうへにむかひ入日をまちぬる松をぞ嵐

武部卿親王

山中の木のはいろかはりもてと尾上いまこそ人のこゝろ

永福門院

乃入るまくに山にさそふ日あまの雲ぞとりぞせる橋の一りと

前中納言資宣女

めくりあふ秋のなかはに霧こめてかくれかちなる月の光

院御製

白雲はかの山よりかゝりてなかはさえたり峯の松むら

題しらす

前中納言定家

さよふけて林の葉に風おちて星かけさえた雲の

藤原定成朝臣

あきの夜の月のひかりはあかしともみる雲を払ひて嵐

藤原為守女

出てみる月のかつらの枝おちてをふきすさふみねの松風

こゝ孫

みつからはふせよとこそ月影のまさしくひとりなる

やまなかに秋星の光をみたやかにそ晴る

空はもむ月の色あかるくおひみそめあかくち

していと面白くおもほえけれは

建礼門院右京大夫

月をこそなかめなれしか星の夜のふかき哀をこよひしりぬる

秋心を

永福門院

くらき夜の山松風はさわけとも木の葉の空に星そのこれる

題しらす

従三位為子

をとこもすゝきをかきふけるとこそ聞侍しかとも

院御製

山賤ふせりて宿りし大井川月をも

秋路とやしるらん

如きあらし吹ゆく宿を志つまりて月の秋みち侍

京洛百首中 旅宿

佐嶋羽院下野

宿かるとてゝのひまより嵐ふきもるゝ月の

おなしこゝろを

灯の光ひかりさ国のうらにさしをふけあ[illegible]

法一位為子

院新宰相

さゆるあるみえつる秋の灯のまさはなれてを同けるか

道助法親王家五十首 旅中灯

前中納言定家

ほのくとあけゆく空の灯はかりやとりとふ旅

雅二位家隆

さえんやてあらひとる春のあけぬとをそふ灯

都とはつまてをしらぬ人こゝろ[illegible]

旅中灯

院御製

雨もるまくらのさとゆふ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

玉葉和歌集巻第十六

雜奇三

前関白太政大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

をつくしまつりけり　彫恒

姫の緑いろの松をとまをしたるに小光をけふ

みはるかすに前の所なる破つの松を

ふりふるとかんくしまつる

法金右大臣

秋の松いくひさしかるべきかんてまるさ風の音

恒法云家藤子よ國こゝろあるに前に絵

きさるふ今後てうに絵をゆ中し

順

ちらすな法とれの松風とゝ忘家やいまるゝ

　　　

庭の面に一本の松を吹風
よいもの数とさくらん　従二位親子

さてわびぬ身は松を吹ちりぬ入あの忘
風あふを形の松は数やそなのけさ山を見る　従二位為子

山家松を浪ぬ　前参議家親

なりぬやは都は見てこの山ぬ松ゆ色
山家夕嵐　お大僧正慈順

山ふかき夕の嵐の数つきて松ひとさ
山家の人を　惟宗忠京

山里にたちぬ蓬をみえさりきあてまちし岸の松色
松尾社に合よ山家夕人を　如願法師

山ふかき里は人ふる物入あひの嵐は忘ぬ
新元百首に山家を　前摂政太政大臣

ひとさいを立のいかに物の言松風ぬて生ぬ
のもえぬ人あ山路数ぬて　入道前太政大臣

民部卿為世

この里は山けなれとはいりもとをとくとくとくとくいりの志

前参議為相

唐ちきつまは木ぬれや嵐のあらんはいふくてうの山の松

従二条院権大納言為世侍

吹あはせむしひまもうつ今はさひしさはなれて嵐ふきけり

治暦二年十月大井河遊覧ふみ侍り

大納言経信

山里は冬こそさらのはひしさは嵐のおとのすさまし

山家の中に

後京極摂政太政大臣

この里は雲の八重ゝ分れいふりにしかはしるしるしの

山陰や杉のの岩のとてゝとてゝとてゝ松風そふく

洞院の家の年久しく住てよもの老

前大納言為家

小倉山松と青はかなみ色老の世をこそしらん

津金財侯をて侍りけり

後洞院御製

ゝ里のあしのつまてさをあらんわ侍りあの

為元百首の中に山家

二条院親王賢助

[illegible]

[illegible]

入道前太政大臣

[illegible]

山家嵐

中務宮宗尊親王

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

従一位散位良平

[illegible]月[illegible]の月[illegible]嵐と[illegible]

[illegible]秋[illegible]

右大臣

小倉山[illegible]月[illegible]

[illegible]の[illegible]西園寺[illegible]

常盤井入道前太政大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

光俊朝臣

[illegible]

前中納言實香

[illegible]

[illegible]

[illegible]

関白前太政大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

つぶやきける

滝のなをいてさらん数ならぬ袖のくちぬるかなしさ

花山院御製

飛山殿に御所をさだめて御せ給とて

月花門院

くゆりたつ煙の尾ぬ山乃岩ねの滝乃糸

高山寺ほとりにて　権大納言為兼

高雄山さそ滝門とそこふて岩けめぐる杉の下ち

彰子

嵐ふけとさこそ岩こしやたきりて落る滝乃

彰子御製

かくらぶ人のなとせゝ見ぬ山ちにふるむあと

中納言為忠卿に　和泉式部

ひとりやみえぬ山ぢもあるものをいかんよるゝ海士

子五百番歌合に　伊勢院御製

里人のいりふ西ぞ雄鹿の鳴く山ぢの風

建保元年内裏歌合に　山風

前中納言定家

鐘のなとゝまるゝ頃しゝ追風よまぬやなりさゝ夕

山家に

順徳院御製

春ふるをとゝいてゝ鶯の来りなく山ぢ

雑歌乃中に　一条関白大臣

年月の数をつもりてはるかの高砂山

松山　常盤井入道前太政大臣

世中はいつもかはらぬ木なれども　あはれ　ふるさとの花ぞ　さきける

寂然大原に住侍りける頃　山ふかき里にすみよりて十首の歌をよみて侍りける

とふものとてみよしの山　西行法師

しげき中に

山ふかみ　なれこそ　まさらぬ　ものなれば　ちるこそ　ものは　なるべ　なりけり

この花の下に大原の里にすむと　下句よ

きて又十首の歌をよみて侍りける　寂然法師

独とはむ　おもひ　なれの　ふる　ふる　大原の里

河内国敷妙寺に住侍りける頃　山ぶかき

この　花　ぞ　ものの　ふる　ふる　人の　なの　一上人

花の　ふる　ぞ　つらけ　なの　一上人

あ　ふ　ら　ぬ　里　は　な　ま　ま　る　と　て　な

勅撰集に入て遠国に侍りけるとて

人　に　い　そ　ぐ　れ　い　　御歌宣旨

ふる　さと　の　あ　を　と　も　の　ふ　ま　ま　る　山　ち　ら　ま　ま　て　我

山里　ま　く　ま　ひ　ま　ま　の　を　と　さ　て　　道命法師

[illegible]

[illegible]百[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらず

夢の唐ふねとゝまりぬるかとやうつゝに我身もしらぬ心地

法眼慶融

宇治山の青丹唐乃浦にゝゝやうつゝに見ぬ心地

伊豆盛継

苔むしてゝ形ふるの松いまゝらるゝてゝ見ぬ夢の庭

寂寞紫門人不別といつゝんと

大江家秀

雲にふるゝゝ入りぬる月の光のゝ人をゝゝ松の色

前中納言定家

さとしあるゝ大乃殿ゝゝ行ゝゝ奥乃人ゝ

寛治百ゝゝゝ歌行と

前大納言乃民

ゝゝ宴ゝ家なりゝゝんゝ

慈恵和尚の形むゝゝ行の

わゝ法の世ゝゝゝ行乃園ゝゝ

ゝひつゝゝて

慈道法親王

法の世ゝゝゝゝゝゝゝ笑行の

ゝゝゝゝゝゝ行と

後鳥羽院御製

この若しかしこと笑行の品々まて色いそい進
前関白左政大臣
嘉元百首に三夕の行と
笑行のうち昔を思ひて三夕ぬふ此歌もあれ
彰院御製
あはれしらすや
その世ちかくなりぬれは夏の笑行
鶯と鳴つるそ
ちかくなりぬるはつ
院御製
四面の山ちかくして行鶯のこゑ
はるしらすや
後京極摂政太政大臣
ゆくはるの惜しむ物の独なるこゑそ
後京極摂政太政大臣
百首の歌奉りける
寂蓮法師
こゑもをしむ
鶯のこゑ
と春よりいまは
ぬ程は親のもとにかくれ
く鳴をきて
又雀の子とりかへてはや
遍子内親王
とりくはれ
はるしらす
後鳥羽院御製
はるふかくなりぬるまゝに
出十首の中に
土御門院御製

[illegible]の竹に未練の糸より思ふよりかゝる糸
文とゝふことを信を結びけり　院御製

情みなそのこせうの文は玉のおもかげとゝもむる物ゝそなれ
[illegible]みえたいふこゝろをかくしてゆめの世とゝあや
[illegible]
右京員外憲[illegible]出家のゝち高野にこもり
て行ゝふ大原の坊に西ゝまりけふ衰
なるゝゝと藤子よりかゝて結けるとそその
こゝろにゝきを付結ゝ
法橋[illegible]

[illegible]
前大僧正慈[illegible]
[illegible]　前右近大将頼朝
[illegible]
なゝきくるゝ[illegible]
[illegible]　西行法師

なゝくこゝろ[illegible]
[illegible]
[illegible]　法三位為子

[illegible]

[illegible]

一條内大臣大將辭申給時書のこと

と仰二条院より申せられ給けるとて月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て給ふとその中参〜給ひつゝゆきさゝ
さ西乃法師殿となりけるとい侍るゝ

常盤井入道前太政大臣

あまとよ雲ゐとゝけて雲ゐとゝけて雲ゐ乃ゝ
ゆくへ乃ゝ月乃ゝ
法乃ゝ法師蓮花王院寂蓮
筆とゝ侍るそ年久〜を世ゝ
けゝと西安ゝ乃ゝ夏ゝ法ゝ皇〜世ゝ
とそ侍りめ〜法ゝ皇ゝを行ゝ

院御製

雲ゐゝ月年〜ゝ蓮ゝ
あゝ乃ゝ乃ゝ別ゝ

法皇位ゝ侍ゝ
給ゝ乃ゝ玄象ゝ
院ゝ
もゝ
作ゝ

中殿ゝ法
ゝ月ゝ
ゝ
ゝ

入道太政大臣

みちとゆつゝ
ゝ

寂恵法師

法ゝ
後深草院ゝ

けう河はさつきまつ世ゝに云ひつたへまつる事
し作とかりゝ作ハ前大納言為氏
卒かもり光あつそのこと色とて元つ情の分におまかせ
東三条入道摂政殿かりもり卿とてとすのこ
と一りとかんよとてをこせ給ひしハ
右近大将道綱母
新古今ふかりゝ世を捨てゝ出家の家と我て書
一ふ文とゝ中けう河後冷泉院書文ハ
けうふまつ世捨て為つかはすも世行者
此上東門院内ゝ侍りけふ新
あゝて出家西なりゝれいさこゝん法を捨
けう
二條院
元ふ文と為ゝ新の本ゝ書ゝ出ゝ給
出返
上東門院
新古今ふかりゝ世捨て本中ハ世ゝ
西院皇后宮れる一ゝ世捨けう
うゝ世捨ゝ河ゝ
ゝ式ゝふ出ふ世ゝ
さ世捨けう出ふ
いとゝもうさよりふ

ゆりあるひとの手はらくてゐるをふるあひ
てはこゝろ考　法成寺入道前関白家の
うの業　家つゝりこの考をはじめ弟のゆりもれ数ものすれ

返し　二条院讃岐

嘆の多よりて山ゐるもの弟ゆりとこゝをやすする
れ句乃ゆ後ゐはけるふもえんなや

前大僧正慈円

人をこそ見さはけの花ゐ世れ行のやとれものして
和歌ことゝいふ五文字と句ゆらに重て
後ゐ　貫之

りゐの業ゆりみちをあるよりそうるさゐ家を
和歌ゐとゝ彩よりみ行けるふ月をく出

和歌　皇太后宮大夫俊成

嚴はこゝ山へゐるもこれ花もゐるを秋ゆ
後法住寺殿入道家に百ゐゐのまを世行を
ゐよ男女をゐて後行けり

藤原清輔朝臣

〈あひの後乃ゆをゐゐ今日をもるゐ
業ゐをゐ

玉葉和歌集巻第十七

雜部

[illegible]

伊勢

[illegible]の[illegible]

世のうきなさけのよやとりの月をとて

前大納言公任

世中はかりそめとまつる月のやどりをみつゝ思ひぬ

雅成親王

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日殿上にまゐりぬ人によりてけり

道命法師

[illegible]

東三條院[illegible]

[illegible]

[illegible]

母服よりのち山里にこもりゐて侍けるに
月つきのいとゝ高き夜なり
人のもとにて物語のついでに
望月の夜なれば
俊成

ひとりのみ見るべきものとおもひしを
秋の山の里の月のかげ
秋融院のみかどの
よ長の夜を
前大納言公任

第三本もとつさ海の長の夜の月の
雅子内親王の
ひとりのみ物思ふ時の
らるゝ月のかげ
けり

藤原高光

光なりすゑの世の長の夜やいかゝとゝろかれ侍りし
高倉院の
月をながめけるに長恒中納言
實守りの
物をおもひて侍りし
三條入道左大臣

いとゝくらき世とおもひて物のもとに
月は秋の夜と
とかんくらしよりて侍りけ
左衛門督大臣

夜ふけぬ
ひとりぬ
この長の長いつりと
ひとりの
ひとりの

空て月よさすまぬ女房のりとへはうつ者

清慎公

九重を花の山りに為なりし我身ひとつや春をしるらん

乗心院御製

あいしらす

いつかなつかしてうん心様花ちりしかき命とおもへ

近衛関白忌れて後鶴をあて年久く

成行者うら花を後悔けるかし

後一位兼教

春をしらぬ人をうらむいつかはつねに枝のもよ

菩提院よみて花見行者うつる近衛関白

今後詩作りをしてうき付ける扇風の絵

勧修園前摂政太政

わすれはみえけるハ

なさんと花ゆへ人ハ無のてもなの春をたのまし

後朱雀院の御事と申しめ歌て白の

殿よれ山ゆ月ひとりに法前の

七八義をして春の菓ゑる梢をはらんして

打まき梢の花ハ義をいとみとりの菓のを物

九條関大臣ゑれ絵よけるとひ絵て宮月

よなりて後の法性寺大実白のりとへ中

上東門院

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元暦元年世中はかうしく侍りける平の盛綱の
のたまとうむとて角人の浦より一首よみ侍りける
八月十五夜月をまなかりける日は辛酉の歳
勢長なりとも小侍けるとうりわれ
なりとんとこひやまもて世の中つるす
とて　金性法師

ひとりのこ海ふやとる月とて昔の友や面ひから
返し　平の盛

ふるとも世人の海のよりをうる月そるき
月前雲常とふとくみ侍りうり

村雲よひりうる月をれい第に未来の義もけぬり
徳大寺左大臣
ゝゝ侍けり　後法大臣

山里物のわもとさい麻はへ初もれ侍
はんらまいふすれり海ゝ林ゝ也
侍けり　道清院御製

出のねなりうのゝうる妹とれむ我身そ消ぬき
後鳥羽院
九月盡よ　中務の宮親王

入道前太政大臣

[illegible]世[illegible]始[illegible]そこうそむ[illegible]よ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

仁助法親王[illegible]てはしまみ給けり

前僧正實伊

秋[illegible]て[illegible]は宿乃村河内[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

堀河関白殿[illegible]給[illegible]河つ[illegible]けり

中院侍従

[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

[illegible]

覺昭法師

[illegible]

安[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

[illegible]

[illegible]

後朱雀院の御時中宮の御方にまゐらせたまへりける
いまの世は何事もいとかりそめなるを
世の人
御屏風
ゆきて人いかにかとしるべきかな
弘徽殿女御
せくに袖をぬらすとはしらずして
天暦御製
後撰
ぬるまくらにすぎゆく雲をなにとかは
大納言雅信
大納言雅信
あはれ世をふるにしたがへてなほ
後拾遺
おもふ事なしてるかぬ
二条院
二条院
二条院

永福門院内侍

武戸て重明親王の
御ハせけるハ　女御　嚴子女王

なけきつゝ袖に涙しぬるゝ門の出てきかな

法花門院弁方子家て一品経を
書供養しておくれ給ふ心の
毎すゝ仮とゝ思ひ給ひけ歌信実
朝臣の手紙にかきて色紙のうしろ
にかけ給ふ

ひとり住身ハうそ寒きに
はゝそとそゝて　前中納言定家

夏の世ハ夢ハ人ハ
むすあよ　宣陽門院

物ハ思ハせ給ふ

うゝ葉ゝ子ハ世の夏乃ハ
六條院ゝ
けゝよ面影もゝ
なりにハ女房乃

昔ふるうすもあつ池水よりきしにんてゐ者そうき
世の中にうなきさうはあるくさこうんけつ法
従二位親子
はきさあつと義くとしひしくてとあつ人ふるさ名そうはなど
先才は一度はそもくもて歌はうと平秋
感とそくとうしひはうれいやつつけつ
清原忠使
うはなどふとうすもうあ世のうきさとふひさすや
返一
平秋感
うふはとうそのふけさと思くひ人とうふさうちひせを

教とはうまて法師中きう母のりてうり前
大近中将維感
うふ世ようけつるとさて
うてあそれもいくそふさあよひをを世
て侍けつるふ
前右近中将資感
あかうつつふをあぬうちふ物くうれとみうそるき
紀伊二位親子
はけつあとふく
西行法師
なうまはくあるよ玉すうそれ義ひうるつ世くり
無器のはそ聖つつ乃教をくく昔の人は者とるつて
御堂関白道長
て侍よまを世侍けつ

独ねよ有し昔よりかりそめて移るべき家とりあつめ
紀伊国三穂石室とかんぐるあり

朱雀院御製

博通法師

とぶらふ岩屋に今もありけるかな人そてしかり
岩屋とは思そ松の木ぬれに昔人よあひみしこと

釈乃こひして山寺ふみて仏供書写して

源道湖

ゆけりたふく
ゆくてまつ雨ちるをとは
百ぢ山中に

八源院六条

たのへなりけりそ春ふかこの世のそ乃極とこへい
人のありなくあるとをもて

待賢門院堀河

をこをもそ波乃へしらは雨ねみをもをりるを世に

前右近中将頼盛卿ひて法忌日に
て仏をかきいとなみてわなくも世に雑
いとれ程しらんなとかくひつきて
しみ結ける

建礼門院右京大夫

いふ世人をなの世に昔ふとと人を和
思なふとをなを物とへ乃ふけるひ出

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前大僧正源惠

母のそふ服あけてとみ給けり

女御藤原生子

今はとてとゝまるべきさまもなくいろ〳〵なりし世の

遊義門院[illegible]

日ふ法華堂に[illegible]

院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前[illegible]

[illegible]

大炊御門右大臣文の服のうちに母まうく

なりぬとゝきて弔ふつかはすとて

西行法師

[illegible]

右大将通房卿はてはせ事の日服さたの
人々とゝそ　　左衛門右大臣女
又殿ゝ御ゝ宣深乃殿てゝ御ゝ物そ御ゝ
なゝ人ゝと云てゝ宮ゝ仕ゝ人ゝのゝ
　　新恒
なゝれゝとゝ云ゝ所ゝ
小式部内侍卿ゝ
　　和泉式部
物ゝ思ゝ所ゝ
久安百首ゝ
　　上西門院兵衛

ゝゝまゝとゝのゝゝ所ゝ
後一条院中宮ゝ
ゝゝ宮ゝ
ゝ世ゝ
出ゝ
ゝゝ
めゝ
　　返ゝ
いゝ
日院乃御事ゝ
ゝ所ゝ御ゝ命ゝ
ゝ仕ゝ
ゝ中ゝ亮兼房卿下ゝ
　　お形弁
ゝ所ゝ
　　左京兼房朝臣
ゝ所ゝ清ゝ
ゝ安ゝ

をとこ山とゝぐんよそもむをとゝ山世よりゆ祖そゐさ
同じ人〻おゐ〻はまよう〻へけりとゝてて

後二条院が将門伝

今まて小世よりつゝとゝゐあとそむ〻ゐをを〻ゐ
讃岐国ゝそう〻しさ世ゐて皇太后宮大
夫後成よみをゝてうきをを世ゐひけり

景清院御製

後の世よゐまをを琴ゐ山ゐをてゐゐむ釣ゐあゝとゐ
二條院左宰相中將經房ゐ出家をゐつを

ゐを行てゐりけゐとゐ〻しさ世ゐひ〻ゐ世乃ゐ
て后宮よりてきゐりてさいゐすゝとて
ゐを〻ゐゐ〻ゐゐと学て

枇杷皇太后宮御製

笛竹のこゝ世をなる〻ゐ山は天ゐ〻あゐゐ琴をゐ
玉音とゐ中ゐゐ〻ゐゐ琴後深草院ゐ行ゐ
とゐゐ永福門院（年〻世ゐ〻ゐ雪を
世ゐけをいゐ〻しさ世行て世ゐいゐゐを
ゐを〻ゐ琴ゐとゐ世ゐとて

院御製

玉つさをそのあまのをぶねより今ぞしれぬる
はるかぜ　　永福門院

いまはとてなれしなかの玉章をとりもあへずぬれぬる袖かな

世間をいとふ心の玉章をとりもあへずぬれぬる袖かな
の歌を見て吹きしをりけるを　　法印定為卿

人の世をそむくさかひの風よりも家ぬしの袖ぞ
鳥羽院にて世をのがれて侍りし夜昔つ
まりの事をとひ侍りしを　　西行法師

たらちねをゆきかへりしかとをみるにつけても
後深草院に侍りしころ昔がたりの
侍りしをりふしまつ思ひ出てよ
侍りけり

別れ路にいとゞ思ひそまさりける昔がたりつゆ
ばかりの
むかしあるあるの月をみるにつけてもあはれ
侍りしかと和のかたらひ
乃ちとりあつめて三條殿
乃ちとりあつめて侍りけるを

入道おほ政大臣

わすれはて人とゝてをもかたらひて物のあはれを

[illegible]ひ給ふ女房なりけるを
[illegible]

中納言為忠

[illegible]ん方をたづねもとめ侍りしに
近清院の[illegible]ふりにけるをとりて侍りし
野べの草をこそあはれ[illegible]
一首より今の歌けさまして思つゞけて
[illegible]侍りけり

西行法師

[illegible]ふるさと聖へまうでゝ[illegible]
八月ばかり坂東に法花堂へまゐりて
まゐり侍りしに[illegible]

をそるゝと分け行ふ法堂よりまゐりつゝ
ふむ苔をたづねやらまして思ひ侍り

西行

入道前太政大臣

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

前参議實時

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

なくなりにしそのかみのなさけをしたひてそみちのくさ人の面影にうかぶ月
後一條関白のくれ行あとを遥りて行けり
人のあるるふるさとをつくづくけり
従二位隆博
夢ともなるかたちにはかなくてもうつくしさは世のあとの
式部門院御歌
人の後を行きて奇入中に
章善門院大清水作
はかなさをとはるしるべの世とうそにかたるさ月さへ
平貞時執権月にて坂中垂て行きて
るるとも雪にうつる行きて
藤原利行
世をいとはんとおもふ心ゆえ
秋は人の月にはよけれと歌行きて小倉
こゝろせはしき月日を過すはけ
従二位行子
ひさやこゝろの秋をとさて
弘元三年神宮月に亀山院に
てゝみ行けり
前右近大将公房

[illegible]

信中納言俊忠遠忌よりの部　野の墓ホ

乃尝ゝ[illegible]

[illegible]

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

但河院[illegible]

[illegible]

[illegible]

勧[illegible]

[illegible]

[illegible]

枇杷殿を后宮にたてまつりて侍りしのち月おもしろきよみ侍りける　少将

ちぎりおきしかたみの月をみるたびにいまやみやこの空をこがるる

一條院うせ給ひて侍りけるころ

よ月のさやけさに入らんとしてこそ侍らんなれ　上東門院

新勅撰にとりいれられ侍りける霊山寺の前の中納言の家

なきあとの山寺の月のすみのぼりて雲ゐの秋の

哀なるかな　権大納言長家

ひさかたの雲ゐの月のかげ見ずは哀をいかに

道命法師なくなりて後法輪寺にまかりて

桜の花をながめて　赤染衛門

あるかぎりの桜散りぬと聞くよりは

兼大納言公房の百ヶ日に一品経をかき

侍りける持仏堂に念珠と桜の枝とを

つらねて　平親世

いろいろの花の枝のもみぢてもおくふかきかなとこたへん

後京極摂政兼実の月忌に前中納言

定家のもとへまかりてけるに

後二位家隆

ゆーてゝひおさてもゆとゝふ義乃義いつゝゝひのさゝん行
二條院うゝしゝ行を行くゝまゝ式乃の文部乃
参河内侍
とゝゆゝて
祇園てゝひそいつゝ対乃雲乃ふゝゝしゝさ秋の一ゝ忘
世中乃つゝなきゝとゝゝゝひてゝゝゝ
設置つゝ院乃補
義乃むゝ乃ゝそいゝらりゝ秋乃月みゝてゝゝけゝゝるゝ帝
建春門院うゝまゝ乃を行ゝけゝ物うゝゝを世行
けゝゝ前乃お式乃載乃さゝりなゝ中ゝ世部式
の乃ゝさゝゝゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

寂さゝゝうゝ世ゝ妹乃世部乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

雲井月を思出て面影と昔の姿とこそ
遊
かさねてすゝめいらせ給へと友達にて月と立ぬるそのき

二條院中納言典侍

前中納言宣家母の心ひよりなる玉ゆ
乃露も涙とこそ思ひすゝめ人こそ宿の桜
とよそへ給へる歌也 望夫石文 後成

煙よりほかの風の涼しくふる涙の露そ玉のたちける

後深草院七月よりくしたを給はる年長
月の十日ばかり永湯の院にあつさを
忘給へる歌也

玄輝門院右京大夫

同年秋の末つかたの夕神のまつ河の
しらけ

前中納言

ふる郷山の紅葉は散なれとそこそ
又乃遠忘ふ仁和寺へ参る小大納言
師頼卿の山河の今日しも昔とこそ
紅葉なれとめとまり遠りて給まるるふ

大納言行宗

時雨とぬれしいにしへ昔乃ふと立つそ

待賢門院これをはらせたまふ六月十日法金
剛院にまゐりてこれを捨てし後ほどなく
てうせにし人の事をもせさりけるいとかなし
そめ侍をはしし事なく共今乃ちとして
あるれつさせぬよ日暮の雲あるに堂えて
けもこと

堀河

君こそはつらきものとなげきしかひなしとのみ思ふ
白河院七月七日うせ給ひにしかなしみ
侍りける

平忠盛朝臣

みとせむ物と思ふ七月のわかるるあふをいとうるさ
後深草院の御服をうして

永福門院

思ふ人はなのたりとも物の数乃あられとそ
なりしはるすの小出家して後よみ侍りける

後二位兼行

世とともにつくさ秋りやあるはむと之り神を家ふ
光しらす

後京極摂政おとゝ

人の世はいとはるくはしく堂のよりかりのひとの日数
鳥羽院のはしとのらふるき文とれるかの侍
乃作と形てさこ者うるすとも之るし要ら

をんなふたりいとうのみまして波乃前の
けまい

前左衛門督惟方

いそのゝ前よりとゝ人をゝくれハ波乃前
世中にとゝ有てはしたなくなられて後
ゆゝしきよし人ハ出て建礼門院大夫よ
ばれしまけるふ兼て物ゝ申よつけて高
く思ひ入てゆゝしくゝ歌
ゆゝしく

お檜物僧都全真

今日ゝてめりあるまじきさハ世ゝ別なり
前右近中将資盛朝臣ゝ波乃前と

建礼門院大夫

ゆゝ考ゝ風吹あまて波の立とみゝふをゝ
ゝゝりふをゝ波ゝなをゝ出まて
ゝみ侍ゝ

忠盛の入道あゝ海ゝ波ゝ高ゝ
波の花御事の後

前中納言通房

いゝ方ゝ前のゝゝ波ゝ前ゝ
前乃やゝにあひみゝゝ女さゝゝゝ
後ゝゝゝなゝゝ

お大納言忠良

ふけとおくなりぬるそとたちてゆくうちをうめちゝ
母の月ごろよりけふと九月ついたち観音寺とふ
所に送り遣てみの日法行けり

従一位倫子

嵐吹みねの雲よりたちそめてこゝにもふかしうりぬ

権大納言長家大納言に申給ふ位給ふ
よをこめて鶏はけふとなくなくぞ行くとて

後一条院中宮寛子

なにてまたつゆぬかの玉さいつゝそいとれりけり
枇杷皇太后宮の御ぶつ佛供ぶつ

小かさりの玉と夜床保昌朝臣母後守小
て給けるよめる

和泉式部

数ならぬ涙の雨とふりてこそ玉のをとなくとそ思
崇徳院ひつさきりて讃岐に給けるを
くまぢを行よりはいとの数よりのちはなり
ほ人の給て給けるを見て中つかさ

芸清法

天ちて神の法路に出ん神のみつとをひやて
ぬ〻小給ふ法数なり母乃ちゝ成ぬとて

て服さぬとて別し後の思出にと侍る

儀同二位

その秋よさてまた程なく有長やうて世をも限り給

妻よりをくりて侍るとかや

中納言家隆

定嶺の世につゆ[illegible]と思ひつゝ

小一條皇后宮三月晦日うせ給ける歌

その七月高松の御所もまた同じ所にかくれ

よけまいらせ給ける

小一條院

別し春はなほ乃有長あるらんとあり給てさ

西山院うせ給ひ秋こそは妹後深草

院うせさせ給しかと侍る給ふあるは

事なと世房のうへ遣り給て

前大納言為忠

二とせの秋の哀いふ草やはらの聖の家も又消なり

返し

院御製

まさりさぬとその袖乃煙りけてさえんそ家もよそ

同じいとの乃ち九月晦日ようみ給ける

良助法親王

[illegible]

中務宮宗尊親王家参河

前参議雅有

[illegible]

前大納言為家卿月ごとに五百首の歌を

[illegible]

[illegible]

安嘉門院四條

[illegible]

[illegible]

中務宮宗尊親王家参河

[illegible]

平時村朝臣

[illegible]

一条資子内親王乃りとり村上のみよ

[illegible]

選子内親王

[illegible]

後朱雀院の御事也源三位白河殿

[illegible]

仰せられ侍りける

弁乳母

嘉久元年六月八条院忌日に蓮花院

ふまうりてとひとりつるすゑをかなしみて母屋のに

やつらけり

前中納言定家

ひとむきの人のみきさきのとにうきみひとつに

なりにしの夢

玉葉和歌集巻第十八

雑六十五

紀伊國よみ侍りける時ひとしほ松とて

人麿

侍りける

住むとてうつるすまひの松ちるまをとはうるに

影浦の額花集えらび侍りける時うつして

侍けるに中納言後鳥羽院とつるすとて

侍りてそへける

宝治百首歌

あの中ふかくそめをきしはしるしとて紅葉をちらす

山の木ずゑ

藤原為家

家の風吹つゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

遊女と　　寂蓮法師

いそくやとゝもさくあるちとせをへよろこびて相之身をかへん
六帖乃部よりて新しよみ侍べきふとの歌

前大納言為家

あさゝ原人のこゝろを推してとゝをつくしたる和しのそ
大納言より侍りける時家より十首ゝ人ゝに頼
せ侍りしふ大納言ゝ仰ゝ侍りて侍り
とゝそ為数ゝ侍りしつゝ者

和歌乃浦やゝさゝなみちるれ藻ゝ刈ねの光ゝ
入道前太政大臣

返し　　前大僧正為教

わすれ草みちふゝ海ふゝ乃藻ゝみ情ゝ
新後撰よりとて侍べきゝ時平貞時朝臣ゝ
ひゝく侍りし　　藤原為守

和歌乃浦れ友とゝ乃ゝて侍ゝ
とし　　平貞時朝臣

なゝ波ゝとゝゝやゝゝ友ゝ乃ゝ
同集よりゝとゝて入侍ゝとゝ
わゝの浦ゝ沿つゝ
中務卿

富小路殿やをゐなる時和方に筆を奉こゝろ
みの哥とて人のもとへ出て侍けるとつゝみ紙にて
まきつゝたとて哥のうすやうにかきて箱の内に
物よ侍付侍る　前関白左大臣
りかやの内の物のもとゝ侍て　ゆゝしき
若浦とよゝ侍る　望月后宮大夫俊成女
人ゝに見えもしらぬ浦の波かはるすゝとも
述懐哥とて　おなじ人
はるゝ哥のもとゝなのあとも身はなるゝ世といふ
哥と後を侍けり　院御製

哥ゝにあはれとおもふ人のもとゝ
おもひて出ぬ人ゝにあはれとおもふ侍
ゝ　権義門院
あはれとおもふ人ゝにあはれとおもふ侍
ゝ　入道左大臣
あはれとおもふ人ゝにあはれとおもふ侍
ゝ　二条院親王宮内侍
うゝねのあはれとおもふ人ゝにあはれとおもふ
あはれとおもふ人ゝにあはれとおもふ侍
ゝ　友宗為仲朝臣
あはれとおもふ人ゝにあはれとおもふ侍
ゝ　平義政

義ゐ〜てまさに西〜とも〜ゐさ相と〜ゐ〜ゐ〜ゐ

返し　道俊法師

とまるとそもそもうき世をいとはしてなき身をかくすやと
光俊朝臣世をのがれ山にこもりて侍りし時
けり

うきなにしたがふすがるる世間をひとりはなれてふる
前参議實時出家し侍りしとき中つ
かたへ侍りけり　最底入道前摂政左大臣

月ひとつをとどめはいとはしかりけるかなとて
後鳥羽院にたてまつりて侍りけり　和氣種成朝臣

返し　寂恵法師

そもそも世をうしとこそ思ふとてこそうきなにしたがふ
寂恵法師世を遁侍りけるつかはしける

とまるべき世の捨てがたくおもふ身をやうきなにしたがふ
返し　寂恵法師

捨てし世をうきなにしたがふ身なれやとまるべき
世中あらじとなれどいとけなきをとめ子
と歎のりてこれやうきなにしたがふ
しるべ　能因法師

何ごとをそむきそめてとまるべきうきなにしたがふ

澄伝和尚生涯して行業ときこゆつゝ

けり　　右京伊經卿記

いとゝえんなる身のこゝろ思ひ出ぬる人の雲をも

設置の花彩中納言行隆卿記

きゝ

前大納言忠良

ふたさすふ身をたゝやらて人の義をとゝのへてきき

前大納言成通卿記

うゝけり　　西行法師

いとゝこゝろ乃やとりハ世ゝ今ハ世ゝとのたゝとゝよ

世ゝとのまゝ行ん人とて山里にまゝりけるふ

なゝとゝりにたゝひもつゝハ苦ゝ義ゝなる山をいてゝまし

小侍従病をゝりて月ハつよけれとゝて

行ゝよりゝ和琴ゝ今ハ世ゝ考ゝ雲ゝ

よみ侍けり　　西行法師

琴乃ねゝ波とゝく流ゝ白ゝ人ゝ義ゝ

青乃ゝ人ゝ世ゝと通て行ゝとゝて

右近大将通忠母

弁　乳母

義ゝ乃ゝよゝ世ゝ西ゝ考ゝ乃ゝ人ゝ

建保乃ゝ比月ゝ乃ゝ人ゝ

ゝ乃ゝ人ゝ世ゝ人

よのひとくやくへくれゆくまてはるかをもて行
ふつりけり　常樂井入道前太政大臣
いつかはん山のあるしは富まてもたのむ我ふるさと
返し　入道二品親王乃助
世ふるとは者ゝうりにはあらねとも世人世ゝはなをもて
述懐乃うたを　二品法親王覺助
うき身はへ世をすらひくゝるの人の行末の奥はあれ
あるとうくなきもしるしる世中をいかはかりなる
光明寺入道前摂政太政大臣　参議雅経
いとうすきもゝとをもて年月をこゝろ行ゝ
あきは山世ゝらひいとすくとも時の世ゝ哀
時ゝへ月のつゝあふるへ天中行とて　高弁上人
ゝゝとつゝるゝ人ゝ生れて生れて死ぬるなりけり
人寿百歳七十稀一分衰老一分癒中心二
十餘年事幾多歡樂或悲哀詩
乃うたとうあ
いとゝ老そてゝ
慶政上人

をとこ所望といひてこんとて今まで世をすごす心ばせ

百月とかくて　大宰大弐高遠

ちりぬる月みるにつけて柱をもくいる山のそこもひかり書

くちなやまして星をつけし月とて

後二条院新子

三月の雨ふるとて月をもとめやすらはれぬる新

月とて待つ人しらす　よみ人しらす

ちりぬるを小新しけれて月を春と我をみん

後二条院為子

なをみるもいつまでうらあれぬる世をゆく秋月

寄月述懐　西行法師

世中をうきものとおもふすむ月の新秋ぬれぬ

後人不知

月と秋のわが背をとひいるや波おちそふ袖の月新

山里にとまりをとひ立ぬる月乃

出るとて

後二条院雅平女

世のうきにいつるをとをもうれてや月の都へ

世を三月にて作りける月とて

後法大寺左大臣

[illegible]

寛永二年九月秋月あらき風の音雲の
色ことにうつりさびしきなかめて歎かれける人
のるる思やらまてくるみ給けり

建礼門院右京大夫

いつくそいつなりしかとひかりの月よ袖にうつるん
[illegible]

前京兆光

世とともにうつるとしの月新
月よさふひけるはまはるくく八橋のはしよこ
りもぬとまてて前約て物情りしかは

[illegible]

はるおもふ秋の月の雲のうち人ふしてもこの
ひとりわすれをうりて給けるを

小侍従

[illegible]ひとりて雲のふかき月なかしるとも
月前述懐とうふことを見給ける

後三位房子

[illegible]

[illegible]

前大僧正慈鎮

[illegible]世とふ世の[illegible]ひまとあるみさとの月の面よりに
[illegible]給けり百[illegible]

[illegible]

山里ふる月あるかぜ[illegible]

御厨嶽子女王

久方の空にはらへる奥山の月のそれ星すむ秋里の人のりとへ[illegible]

遍子内親王

雲ゝはらへ[illegible]月[illegible]

百[illegible]中に　式子内親王

今はとそけとそ[illegible]

西行法師

[illegible]

山里よ[illegible]

[illegible]

僧巻法師

我とと[illegible]

人のりとへ[illegible]

延子内親王家歌

[illegible]

[illegible]

後拾の[illegible]

[illegible]

[illegible]

世中はせあてとうるさき角田川や月はうらのやうにみえむ

高弁上人

久安百首歌よ

けふやはてあまんいそうかつて月と今はれ行世

前参議教長

月をこそ

清少納言

月にはあかぬ身にうつるけしきつかふやうにれん

あはれ世をうきたる

はれ世をうきたる

彼法寺左大臣

あはれ月のあふとそいそくらんこれあること世をうき世と

お中納言定家

彼ちすす

五月雨を我身よそなる歎して流久しき世をそ思ふ

後法性寺入道前関白太政大臣

けふ百首歌中に

宜秋門院丹後

なふとくをきかるる歎らんおりそはまこそ歎命を

述懐

前大納言忠良

数ふてあふをはつらぬるそ月をなそ世中にをそ

藤原信実

物りそる光のはえ入流そ月と思ふ袖はまさりけり

鴨長明

あまはいとふそしをはそふ数ふるぬ月とんとの中そゆ

洞院摂政家百首歌よみ給ける　心を

法二位家隆

身のうしと秋のなかばをすぎぬれば世にふるほどの月をこそ待

述懐歌中に

中務卿宗尊親王

かくらすいとゆふかけてあはれなりけり山陰入道前太政大臣

月をのみ世にもうらめしさはやがてこの物思ふ涙なりけり

建久六年法皇しらかはの百首歌中

述懐

前内大臣

うらもなくつきをはしたるあまとまつ世をいとふ

法印聖勝

たのしみをあはれとおもふ我身にてあととはてやあはれ歌人

歌人不知

あはれなる身とはしらでやすらひぬ世を道

お兼後為相母

しらはしのつのふまもなき世をいとふ

鄭子

平政長

あつまうて月いふりぬとものとはいて雲かふかぬ山陰

述懐のこころを

平宣時朝臣

ものとはしまもなきあはれの光陰命なりあはれ

いふかせんそもさて時のうたの世をそなたとふかく侍

中務宮家親王

わすれぬきしのうたてを世にうらみきりの命のそらの

旅人しらず

雑の中に

あるしらぬ老ぬるいよ生ひおひしそなたの身を侍

前参議為相

日吉社よ詠てたまりけるうたをこの中に

なかふとそもとめのふるらんとよ世ふるう生まとうの

述懐の歌中に

院御製

お大僧正慈鎮

徒よやとをれ我身をうむ民のこころなへて

持明院殿よて郡とさうりて人をこのみ侍

きるふ玉とふとを

前参議為相

藻くりと光やそうん松の浦やひあるるの玉ふまて

月前の旅侍けるに和歌浦と

従二位為子

わるの浦よ玉ふ仁王のひらをかんはよ

述懐のうを

従二位隆博

をろふる月とをとまを世をうをとそ形をを侍の

續古今集えて侍るの時撰者あまを加

らを作て後述懷の詩中にしるし侍けり

前大納言為家

玉つ鴨長とみるや我こゝに映る面影ぬしなきの浦せ

雜の中に　　お大僧正能惠

ふるに見る代々の形ぬるのりの道あふぎを祈りあれ

前参議為相

こゝ人の國ゆくてゝ神代とゝを海路のみち

前元百首の中に

たゞ近中將為友

伯耆の松思ひむしとの業と我身よりつゝ海路みち

前中納言資宣

若浦ゆわぬ身をあれ世よもあい雜沒人とゝをしたゝ人

守覺法親王家五十首の中に

河述懷の中　　三條入道太政

ゆ法をこの身ゆりいゝ世ゝとゝふるさ

百首の中に　　式子内親王

うむとゝなをゝとゝ世のおゝえよ源氏まあ神の

前大僧正　　西行法師

ゝゝ心よ物とゝなりゝ世ゝ身とゝ我身なり

世中ゝゝをゝゝ法ゝゝふおゝゝけゝ法とゝ

人よつゝ考

僧基法師

天の原ふるさと遠ざかりぬれど

月ぞ昔の

中院侍従

世の中とふるさと思ひ出でば

月ぞ昔の

和泉式部

いかばかりなれば人の命とて

世間はかりなれば人の命とて

花山院御製

ながめしかとて月とつれなく

後撰朔に

雖とうらぶれてもいかゞあはれとも

人のうらぶれけり

友原惟親

いそのかみ古郷とてもいかゞ

返し

知人不知

ふるさとにいとゞ世のうきぬるかな

久しくもとふ人の絶てとはぬ

てはよ世そなれて絶けもして

少納命婦

寂しさにたへぬ清水ぬるさ

人はとぶ

述懷の中に　平忠度朝臣

[illegible]

前大納言忠良

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

歌しと給ふ時人々の色々に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五十[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　前参議家親

[illegible]

雑奇乃中に　お右兵衛督為教

いとかなしうこそ侍りしかとかきつけてあまたそ侍

暁述懐と云事を侍りけ

入道前太政大臣

[illegible]

天台座主[illegible]

[illegible]

[illegible]　前大僧正源恵

[illegible]

[illegible]

述懐と云事を　法印公禅

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　法印忠快

[illegible]

[illegible]

[illegible]　前参議實時

[illegible]

[illegible]　平親世

[illegible]

述懐

[illegible]　平時

[illegible]

前大僧正道昭

[illegible]

左近中将具氏

[illegible]

お春殿御局

[illegible]

左御門院御製

雑部

昔もかくうき世の中とながめすて我身ばかりの

後嵯峨院

[illegible]

お関白左大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寄海述懷のこころを世語りけ

院御製

俤は海の面のあまれるを月とぞ見るつくしの浦

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ

朝平門院

うつろはぬ月日とぞ見てもつまぬ身を交るかきの

袖に伝ふる子

人を世にしたがへばいとはしくて今ぞ思ひ知りぬる

雜歌中に　院御製

なほ思ふこころ思ひうるかの聖のをしへ乱れぬる世

永福門院内侍

をしてう絶えぬるふるさと絶えぬとなほ思ひ知る

百首歌中に

前中納言定家

月はやとこの世にうらとなりてこそうるかの聖の

日吉社に詠まりける百首歌中に

お大僧正慈鎮

世をふるにこひしかるべき友をかはの世の社おもはけよ

ふるさとをふるにつけても生ひてもみやのうち

前大納言為家

いかなるてんまにこころをとどめうらもとをとをそうらもとをよろこん

万葉集の初一句を題して人々に示す事

はをはけふふきもらいさまくはいとるもと

新院御製

天暦日光いさまくてこの世人の心はるるこそ

雅房卿中に

勝子内親王

おもふ事はなかゆるふさをたくひのしるあてそ

往事と思ひてのこる行末

権中納言俊忠

長月紅葉のみちを見て友なくなる昔の下にちる

懐舊の心を

普光園入道前実右大臣

いまへと雅房ふるうりてもはかわること思ふ人のあはれ

友原則俊卿

乃ち後の昔を思ふもとしをいまを友をもきき世よ

永福門院

思ひそゆく月日をとうしをはるはかの忘れさ方をとをそ

二條院参河内侍

思ひ出の昔ふるとは成ぬ中にはかるもきき身をいふ世ん

前中納言定家卿

はと方のあはれ世ちをつりわるあてか

はと行ふるに八月廿日遠忌を佛事

して人〻ものまをせばやと秋懐旧とて

と

前参議為相

めぐりあふ秋のつきをもなほ世とともに神てやあけき

雑所にて

お参議家親

月をさへその世とそもとゝ思へとも方角なりけり

源義行

思ひつる昔とをもはゆ世の人とさらはゆくゑをしらぬ

星ふる人〻とはなさられぬ

俗世

小馬命婦

ひとりして乃ちうきをしらとて○と誰ゆゑ我と思ひけり

人麿墓を卒都婆にして仏とて出付給ふ

清浦別当

世をへてもあはれをかけ給ふ墓ゆゑ苔下ふるとをもせられ

同墓弱侍けるに榜を明神よりあらはして

よゝ給けり

寂蓮法師

ゆゑさとと昔の下もまて弱とをもふ榜のをもはや

泡沫へまゝて者の次よ在原寺とそてゝみ

て給けり

法三位為子

ものゝそのなをとてあり京昔乃紅とみるもの

北野ふ来ゝとをなつゝ人〻ものをもとゝ御り

なりて又出仕けるふ道ありふまりてこそ
仕けるものもなりわいかに仕者ら

大僧正行尊

たづねゝ命をたにたにあれはいのる世よあひも花
紀伊國あら浦と申所の石とりてこれ
をのりらに玉くに仕をるふるさ付る

高弁上人

わをさりて坂よ思ひ人人ふくいとひてこりね角の浦石
後深草院御時五位にて官廳より
国代へ選御ものりてはなる仕けり

弁内侍

雲かゝりて月も雲井にさいふるとを思ふこゝろとり
懐舊のこゝろ

藤原秀茂 後一条院御代

こゝ方と一ものりてみ蓮はけりてそをさ昔ふり
法華行深

いつるをいつくさ昔と思ふたるものいかゝるひかん

大江貞重

今をよりてゝ花ものとをりふ思ふすいなを昔ふり
後二位廣花

んをいとをををふいをををりれ思ひてそふれ

前大僧正慈鎮

昔をもかたらの文に見て難波の蘆のよかりし松を

懐旧の心を　院御製

情ある昔の人にかたらまほしてみなうらなとかりかはす

行むかへてうれしむかしの世の中に見てまこころ

月日のつもり

玉葉和歌集巻第十九

釋教哥

仏を礼拝乃さの礼讃ハ仏を拝ハ我ハ礼拝するなり

これハ善光寺の仏法物語ハ未詳之面

ちりはてゝみ山の奥もとゝよ人てハ山ハ白雲

ハ今ハあゝ人石清水ハ社ハ鶴て百万遍

乃念仏ハ　伯けるハ又義あひゝ人

りの絵して三心具足せゝん念仏ハ

ゝ人ゝすゝ伯々れし仏そハ我

分ハ三心と云ゝねハゝゝ法ゝゝゝゝ

ゆゝしひて祈まつりける義よりはんえ者ら奇
とゝめん

芦河の聖ゝれの僧のなりゝしに世をゆく
見いまゝ人同社よ義て念仏の教通も
おりゝゝそとゝれ西まとゝ人作り
けりと又ゝゝふひとりてゝゝゝれ
ゝゝ人作はまいつまゝ西とゝれゝん
こゝおりゝゝゝゝとひて祈ゝゝ義ふゝ
みえけりとなむ

法後白河の人おまの月まや雲ゝれ祈西そ
ゆけ

これ真如堂より西ゝて聖世の悪部の
たのりさとゝとひゝゝゝ我身の業
障なりきゝゝと悪西て西ゝゝて
作けり義小宮ゝゝ御教ふくた
をさせけりと面

極楽へ生まんゝゝて面白ゝゝ仏とゝそ三心
ゝまい石清水社よ西ゝて念仏往生の
事ゝとゝゝゝゝ人の義ふゝゝん
つけさせ給けり

いゝ小せん日ハ言ゝゝ西ゝ作ゝゝ人の西世と

老い康平の比ある僧清水寺に通ひ
まゐりけるまゐふみえけるとゝん
[illegible]
此僧いまゝ出家し行
らさりける時粉河の観音にまゐて
敬心して経[illegible]行ていまゝ入所て
[illegible]
往生とゝけ行へきこと疑なけふ間
陣ゝ[illegible]
[illegible]

此僧不調事
ひ方に同寺に別当ありける僧
[illegible]
[illegible]
[illegible]
の前とゝけるに時ふ[illegible]て滅を
なして[illegible]
[illegible]
て行[illegible]
けるとなん
[illegible]
此僧の友原時重上総介よりて

て行者の時法花經一万部をよみ世伝
けり其の後は地蔵菩薩乃みえて
よみ世行けりとなん

なほもみふるとなん山の僧未まだ菩提乃心を
世をすて人人乃ためとりて性空上人
よさつけ行者をとなん

高野の僧侶　行基菩薩

山寺乃ことを聞て父母をとぶらひ
彩色をす

僧正善珠

うるわしくつくりたてまつる弟子乃風まつ

戒珠傳因縁不自とふ事を

慶政上人

情一寸に法華半寸に聴觀一生空過と
いふこころを

かくいふ人ありけるの僧やまに籠りて
俗乃世界を捨けり時に人ありてとふ
何よりまて世行てこゝまで世たまふけり

花山院御製

なに事をかわれはいとなん佛のみをふちなれ

大散会中に　　選子内親王

あさぼらけの雲ゐのやまもいとゝ　　高弁上人

めかれぬる花のうきまくらにあかつきの

ゆめはかりぞ春の路のとゝまるとゝ　　源宣上人

紫のそらの白雲とゝもに花さそふみちの

うへ方は思ひ入れぬ花の山　　前関白左大臣

行因上人

六の花ぞまつ人のうつりてたにのうゑ

世をこめてちりぬる春のなごりをしみ　　丹後僧都長算

　　権僧正慈源

ゆきかへるさんせのとゝまりて　　西行法師

　　高雄山寺にまゐりて

そ猶ゆけりの　　最蓮入道参議左大臣

あさぼらけ　　保延二年勅撰

法花経序　　不乃ん

民部卿藤原

同所にて法橋をうけたまはるとき　久我内大臣

法橋あのへしみ山の苔踏まつ分もそなれく

佛性夜滅度如薪盡火滅のこころを

法性も今は前関白左大臣

人をもて法をあらはすとは彼ふ為なりて法ふ為

方便ふ若人散乱心乃至以一花供養於畫

像漸見無数佛　法華経

一切衆生悉有佛性　涅槃経

同所にて

世間ふ法ふ為て佛を為ひとしたてまつる

前大納言為氏卿ふけう佛事の次

よ一ふ経文ふ為みを始めふ辟喩ふと

平宣時朝臣

を車ふのとうとへとたのまるい彼世よめとる分とる

秋萩のこころを

真淳上人

彼ふりてみやとやとやとふ鶯ふ為みの花

信解ふ園流諸國五十餘年のこころ

友原親盛

指大納言為成

長うして三界をさりぬる五十あまりひろふや四海深花
薬草喩品のこころをよませたまひける
宗法院御製

ひまなくふる中に草木の枝にあまそそぎぬる秋の雨
授記品のこころを
法成寺入道太政大臣

毒をもりて佛のたまはせしことを聞人をも捨ぬ法にこそあけ
同品の心を
後人不知

ぬ末とさくらの色にうつりぬる秋の雨
廿八品の文の中に五百才の品のこころを詠
平經盛卿

衣をにおもとをもりあら妙の玉をとけそへ
同品のこころを
赤染衛門

忘れぬらんつもり高き玉そとも首尾ふかひて詠
後成十三年佛事の前中納言宣家
一品經書しぬる時人紀品のこころをよみ
常盤井入道太政大臣
てけるけり

ひさかたの空の岩ねの三のいつまて苔むすとしをへぬ
後鳥羽院御製
けるかに同品のこころを
法眼源義

わすれしひとのそこと法師にてうふ法の下京
同ふ今我念過去無量諸佛法如今日
而閑居しんを　続人しらす
昔今こゝみとけて法のこゝゆ来とてもたるもやすす
同ふのんを　前権少僧都源伝
ほとの人なふてこそ思ひ佛は法師人まと
法師ふ
法のりてはこゝ人そたのりき秋こゝ後と六
寶塔ふと
大師とまたとるのやとこゝ法ふあるこゝ形やるこ

こゝふわるあ光もあるふ　前参議康能
設置門院大納人書こゝ弱て佛ふを
こゝふとて人こゝ人散ふこゝませ給ふに
　　権中納言長方
ひさつ色と系の家ふ教とに法の海ふ人やるこ
待賢門院中納言人こゝとめて法華
廿八ふこゝませ給ふに　挑灯ふ採薪
及菓蔬随時恭敬
　　皇太后宮大夫俊成

彩り畫は本尊を求てそうこうきはめけり
法師は又如来滅度の後若有人聞妙法
花乃至一偈一句一念隨喜者我亦与
授阿耨多羅三藐三菩提のこゝろと
仏のおきてに第の末代衆生の世をすくはんとて
勸持品とよませけり　　前権僧正實聽
大乗ふわゐ光と天雲とかゝりてひけり
安樂行品と　　大乗の宗
　　宗法院御製

世〳〵てをもふさてはこゝ法華経をあひ
奉量品一心歓見仏不自惜身命
　　勝命法師
ゐをもあれ世〳〵の為ふ仏あるは命をすて
たち〳〵品乃ゝをとゝませけり
　　宗法院御製
月新のいとは人乃為あるまはひとりみをもすてゝ
出いとゝ人〳〵乃たよりとなりぬ小船は月の光
不惜身　　前大納言公任
　　常住法師

[illegible]

薬王菩薩宣流布

前大僧正慈鎮

法の花ちる宿ちるなり鷲の山風の吹

法花経にと

おく大僧正云件

春ふかき花を今ぞ匂ひぬる軍あまりの鷲の山

毋の月にて七日ふかけれは法花経にさ

信者一結して　後一条入道前宰相宣房

ひとすらに唱へてすなはち生ける人

諸仏出世不為今度生生死入涅槃但

為度衆生生生死二見耳

光俊朝臣

春の夜の闇の時なと世よりふるとしもやりみちかはあるかな

云量義経軍千余年未顕真実の心と

法印　献園

軍あまりなと思ひけるこの経と今ぞ鷲の

維摩経にと

小弁

夕嵐ふかぬ日ぐらしの雲の経なれはおそ

心経にとなり

権律師　澄覚

相ともに心ひとつ経ふかぬ日ぐらしの雲の経なれはおそ

金剛般若經如來所得法實法虛妄

僧正公朝

[illegible]

云量壽經巖澤國土皆悉觀見

源親長卿

[illegible]

五濁の中より佛を

[illegible]

[illegible]雲に隔てし時つもりてまことの月の

秋散ぬる後ぞ[illegible]

[illegible]十界のこと

[illegible]十[illegible]

[illegible]

[illegible]

日ふかくこゝろをたてゝ今はうれしき世中と出たてり

不邪婬戒と　前大納言長雅

世間もわすれぬるゆゑに一切のものふかくうらみん

為道をもめぐり一切衆生の心性の

ふかきを　入道前太政大臣

ふかくこゝろをたてゝ今を悟の光をまつ

大乗のこゝろを　法華経前太政大臣

殺生のみちをはなれ鳥のこゑをきく

永福門院

うきよをふかの宿とおもひ捨てゝ

前大僧正源惠

秋とすゝこゝろのまゝに雲かゝるみゝ嶺の月をも

なるもとゝのそこゝろすまゝにこゝろ井にうつる月

お大僧正道玄

よりすゝはとこゝろの我神の源よやとるすの月

権僧正覺円

法相宗ハ三國傳来して相承いまたえ

たるこゝ真福なるよのこゝろをしるとなす事と

なりしゝ　お大僧正良信

こゝろのうちをあらはしてゝ世を法の水をうゝ寺をかゝてくしをそ

秋教寺中に　前大納言為家

あひてとはぬ世よむなしてもいそぬるのさとりをもとめん

お大僧正道玄

いふせんナれはうしの橋立てしらすゆく

流来生死乃海を　法人しらす

第九こうそあふ海ひ出くあれて我橋たつらん

久安百首よりよ秋教の心と

待賢門院堀河

ゆくあきをとこあるりとゆひてくしきはさけ

月よもすく松系と袖ふとふとと人のませ

法橋成昭

ゆけふ

風やもてそうそ月ふとうてん秋を西のそらにあり

常行堂九月聲の念佛を独学ゆて

前大僧正慈源

秋とすすあるよんの色ゆ袖乃なをそ身は心

後鳥羽院御出家乃時出家戒師ふまりて

ゆけうよ又法第九こうたろ世ゆ

ふ出るやうよ海りて心ひつ老行者

二条院親王宮助

おそ世九色ゆ世代よ海りんの色をまそみか

中務卿宮親王家百三十五

前僧正實伊

おとゝしの秋のはつかのころ

園宮上人

もゝとせふるへき法の師の

聖戒法師

秋数のこと

なかふとて法雲院の月とてそなへん

入道二品法親王覚性

西世界のこゝろ法の人

入道前太政大臣

慶政上人

勢多の橋をこえ法の門にいりぬるのこゝろをよめり

龍胤僧正奠供宣過徒設殷勤後代澤梅

あすのこゝろ法の月日をこゝろ

顕照法師

度生結度縁のこと

威阿法師

山ふかき苔の下ゝもむすれ人なそこゝろ苔のけ橋

百三十五中に

後鳥羽院御製

ちかふこゝや行の世をあとしまこゝろ

雅成親王

角のごとくなる物を首とさしてこの花を見るに
為煩悩賊　蓮生法師
浦とはむかしのなごりかはらねどかたりしひとの
袖ぞ昔の　前大納言忠良
捨以智恵水永洗煩悩塵
なりぬるかとふ蓮路もさもこそわたらふ渡りなれ
梅廻生死の心と読侍けり
中宮亮重胤
いとまなくすみ世をしらでいとをのみ身にはなれ
宮治よりて河の奥にあるとて八講行侍書
法成寺入道前摂政太政大臣
宮治河のそこにあるいはねとこそつかねはとこそつ
八月廿日ごろ法成寺にまうでてこの
八月ばかりまなくて池の蓮やうやうひらけ
とりあへる月いとをかしくみえけり
さきけるはな花
池のはすのうへの月をみて西方の光をとひやはる那
院の法のり幸久しくはたらきまうけるを
四恩元年御即位の日の日吉社の神楽
前にて昔今のものがたりをして侍けり

二尊法親王号助

拾蓮花八葉上者有如来

慶政上人

法の為ふるさに成りと雖もなほ其の数をひろう

唯識論中ふ如海過風縁起種々波浪とも

んと

嵐吹く波の為ちぬ法を仏とあらはすの物やあり

紀伊国ちの和うして西寺乃塔ぬ雲ぬまさ

まてみえるに仏塔を題のうちい宿生を

拾大僧都 能俊

慕乃ぬいとまをめんう為あるりといふことを思ふ

まく渇仰のあまりるうれをて殖殖頗

梨の地ぬ礼ひとつるんちてなく礼

拝をうに天竺ぬ大迦大師周位乃付燃燈仏

よあひをりて流ようとをうて如さ世をうを

所ぬ今ふ海ぬりて我ふ福田ふ事ぬひ

出ぬ風くよ為ふ

高弁上人

をうをつ法ぬやうに西乃ふを海て法をうえね

京極前関白家の五十嵐乃拾ぬ仏拾ぬ

の花をうを世をう人乃んぬふ拾ふ拾ぬ

[illegible]

二条を望たる所清

よつてなり

あらひるさ山ぢの あめふれども この一枝を 白くぞ

千手観音の

法華経 法師品

御本尊 [illegible] 嶮しき 我身なれども 仏

仏法者 [illegible] 導師 [illegible] 菩提

送給ひけり

あらひるさ山ぢ [illegible] 法華経 [illegible]

状数御 [illegible] 中に

院御製

[illegible]

般若心経の 畢竟空の [illegible]

前大納言為兼

[illegible]

二月十五日 [illegible]

院御製

今日 [illegible] 涅槃

仏乃涅槃 [illegible]

後二位藤光

[illegible]

舍利講のこと　　従二位家隆

ほとゝぎすなくこえそあやしかりし春の短夜の月

秋はなを清顕とゝふ時うり行て侍る

雲を雲とてあり　　高辻上人

ほの〳〵とあけゆくそらのあけぼのを

ほとゝぎす鳴のこゑ

玉葉和歌集巻第二十

神祇二

あま照す月の光に神垣や波の上なる縄の内の界

いせの海の南の浦の海士の子の海にあり塩の内そこの乃ちふ法師あて

まうでて中地にてはるかにおがめば雲

沒なまへよりくまなくはるかなる四方を伝

てすゝこ海とゝけふつきさせ給けるとも

はるかに世のとけ給ひしかたそこの山の道

世に神の美日社の廻廊はるかに伝聞

おもんみるに、つきさせおけりとぞん

いさきさるにをもむきの池のふちにゆらんすまひしかの

えいあるべしとひとえにおもひて終に世

のすがたをもよおしきさるにひとりのね

んぶつをすすめんとゆさいけるにて

ことにつきくはしくはなをあふけさ

せおけるのちなるべし

十月あまりの比和さのみとをもきひとりをしたかしき

をいの建慶乃ちとり嘆義社のほれをもき

ふまりて通和さりけるへの義り

つきさせ行けりとぞん

伊与の国うちのこりはてをまて我らはをもて

此方は住吉の社へいやしき男をまりて

行けるに奥会しにあるにて法師

まりうちるのあいさ事をやと思

ひくはうちとをるふるへけ

ひをおけり

行ひぬるにいさの主やもうはりかうるを

この方は瓶嘗よ行をるへの子をこそ病

して日数をさりけると歌をなをさ

てんまの野へ出でつゝさゝ田形書とき
くまをこゝろざしけるとの月へく
七歳にて出こゝろざしけるとき
けうとなんん
我ゆゑむかしの般若菩提迦の山はれんこゝろ
はるかの慶上人般若菩提とゝかり
こゝろ井てさゝ田大明神と勸請し
奉てまつりけんと思ひ給ふるに
さゝ田行こゝろざしけるとゝ
我りすこゝろの出るとゝ人こゝろをなぐさ

元亨法治元年の春比彼野小牟山の
麓ともこゝろめぐりなりけるあるゝ
人夢にさゝ田をもんこゝろ者
こゝろ小こゝる者ゝ金佛とゝ人の給ふる
といとこゝろ思おもえてこゝろ出こゝろ給
きこゝる夢にみえけるとゝ
子ゝゝ母ゝ夢のこゝろとまれおりて金佛ゝ者ゝ堂ゝ
日吉の聖真子御前とゝ
ちこゝやこゝる者ゝ小者若せんこゝろめこゝ者ゝこゝ
はこゝゝ者ゝ日大明神高弁上人ゝ御宣

行けるとかん

そのりきちにあつてちかの人のまつ国ゝ寺をひらき
ひろいあつ人ゝ嘆ぜ大成大的神より奇と行
ちかれて苦よりんゝ勢るて行ゝれい向き
うすやゝにゝ世治てをうまとあつ出家と
かんや仏ゝちとなむ

ゝ行けるとかんの拙と文よ遠国
この方ハ武蔵国より行けるゝ人ゝ能聖より
て證誠殿乃御前より通来て拙世
乃事と行や仏者ゝふ苦のちよ出あ

ゝ行けるとかん

時のいろ形をとゝぬをおまをつてあてとみよゝて見
これハ京聖大的神乃出ちとかん
ちゝひてゝきあまいゝとを聞をゝりかきねひとゝ見
ひろいあつ人ゝ目と望て清水寺地主
権現より行やけるふ出ゝ行けるとを
面て出ハ仏ゝてゝ元と面ゝりんの九ゝ仏ゝ来と
世行いあつ人ゝ分れ出ゝあつるゝと能聖より
まゝてゝ出ゝ中ゝ行ゝ出ゝるゝ行ゝて
久ゝしゝりけるゝと仏て出あより通

[illegible]てまゐらせあるべきよし
て申しに付き[illegible]と仰せられ
ものもの仰せられ[illegible]の御前のことを
つとめて[illegible]
つゝましくしてものはなしをもあむるに我と
はなしの法華経清水寺僧長吉法師を
[illegible]して法華経をよみまゐらせ
地蔵菩薩の御前に通夜をしけ
[illegible]箱をかたなをなりと
[illegible]

中ごろ七月節句の事なり[illegible]
より[illegible]
つゝして[illegible]
[illegible]
[illegible]

風をあつ海のさすらへにまよひつゝ雲ゐ遠くなる月をかな

こゝい小野の御幸とゝん

わが宿よ雲ゐ桜花ぬれぬ袖ふるさとの人の月をさそふ

花の祇園の御幸とて人の花よみゝん

けつとゝむ

祇園会社中に　後京極摂政前太政大臣

我宮ゝ天てる神の日の中しるしをいのりそ行

伊勢遷宮ゝ参詣ゝ　藤原定家朝臣

神風や勅宣の宮ゝ神ゝ世ふるゝ

嘉元ゝ年賀茂社ゝ会ゝ社頭述懐ゝ

ゝ事ゝとゝゝ世ゝ

後鳥羽院御製

ゝ垣やゝゝ世のゝゝ

乗山院行の御幸ゝ人ゝゝゝ

せにを行けゝふ　入道前太政大臣

ゝゝ世ゝ山ゝ雲ゝ行ゝ神ゝ

ゝ　ゝす　藤原田道朝臣

ゝゝ今ゝ

神祇ゝんゝ　祝部行長

神よのことつたへ家の風吹つたへて世をゆるされ
天台座主よりて伝授ひろめ給ひ
宮内法親王
昔より西の方神乃御ましまして我身と今そ知る
日吉神輿感神院よりおくり時者時
月あらく伝ひ給ひ
前大僧正忠源
神よいかゝの月よ猶ねてこひやいつ志賀の浦
雲布施よりまてしらく伝ひ
増基法師
ちはやつるつのかゝ神ふりはへおもひ身とかゝ
熊野よりまいりて伝前ふくよ伝ひ
大僧正行尊
人くとかゝ我ゝ思ひねとも神ふりはへ身とかゝ
神祇のこゝを
坂白河院御製
いく千代の行末をしるしてしる方代まてゆくすえ
年久くしかるゝ坂弘長元の閑日記
うゝりて続伝
新撰三首の歌の第の神のめくみ乃つゝ
春日社よりてゝ続伝
普光園院道の冨白左大臣

前大納言為兼

為兼卿より賀茂社へ参詣のよし申しつかはす

人々みな参りもふとて参れと申されつれども

賀茂参詣の道清使つかはして板倉の長官

より成敗次第の使ひとめ給ふべきのよし

ふれつかはして　前中納言澄良

祇園社へ参詣ひ第をもて二度つかはす

四月八日松尾祭使より出て給ふ内侍

誰そと上つかたの給ふ御簾ゆ乃

なさけまい　後深草院が将内侍

問ふ人あれあらぬ小嶋殿とさゝわまこ所へよりのり世よ

祇園社の中ふ三日と

常盤井入道太政大臣

ちりぬるわさとも神ふけ

九条尼大臣女

みさゝ山ひ京松ゆ縁ゆ乃

雲ゆ乃ゆ

後深草院御製

岩ゆ乃ゆ

寶治二年十首の会よ

後久我前太政大臣

やくもたちのゆく峯のいとえんにて雲をわけ入る月をみるかな

百首の中に

前中納言定家

雪とふるなのむらぎえにまがふ賀茂の社の月の影

月をみるかの賀茂社にまゐりて侍りし

左京大夫雅経

わたのむらの河波高くなりまさるとしの水

陰祭舞人にて八幡へまゐりて侍りけるふ

ほうのすゑにて馬場の前へいさりて馬場の立

てのもとにけうの僧の侍りしにて

らひつゝて殿上のそゝやにまゐり侍りて侍

けるに程なくゆるされはべりしかは彼僧のもと

へ侍りつるすゝて　平忠盛朝臣

うもれてとゝまるべくなるいはゝの神にまかせ

日吉社にまゐりけるに百首の中に

前大僧正慈円

西とにはかれて佛のみちにまかるへきとのゝ侍りしへ

ばかり　社にまゐりてゝみ侍りけ

る　大僧正良覚

身のりふはかりのまとちひそめわつ山をそ神ぬさ
神祇のうちそ　法印頼舜
男山みなもり照る月影ハ人のこころのそこもむ
前大納言公任卿
いひつくしけ　よ人しらぬ
岩清水ながれ絶ぬこころひさ君ゆそ神もうけ
正元二年正月十五日
女御入内　後深草院御幸
大この世ハうつるとも陶を繞ゆみとりの春ハ
彩しらす　権大納言為世卿

三笠山毒のはつりハ神さひて月清聖人ハ昔を恋
小弁
天の下神ゆすてふみさ山ひけふこそ人ハおもしか
はは住ち入る前関白右大臣ハ給ふ時家二百
うつ世給ひけふ　皇太后宮大夫俊成
ふるさとに形をしの給ふ松りや今ハ形ひまちん
神祇のうちを　中務卿親王
みす山神のもとハ昔を越て仏ハ小乃花ゆ
見うさ山神ハ山をとふ月ハ光ハ神ハ
大中臣泰方

建長七年十月廿日社参行幸給ふに
為りて還御給ふ
四月廿日さに東海道陣にて出給ふ
乃刻くなりさこえけるふしつけ給ふ

後深草院御弁内侍

今宵山の端の月の明るさに月新しくあり時を
後白河院御所八十嶋の使にて信濃
てこそ給ひけ

後二位朝子

見てこそ秋の月の明るさに信濃松
後深草院御灌頂長講堂にて給ひけ

巳の時のあとせ給ひて六条の弟
の殿御所より除参内御給ひけ

前大僧正公什

岩清水ふる雨いふるさ葉もこそ
然聖御参内ひやうしにて知
てけさ給ひけ

後白河院御所

三ちのよ雲い数とてうとてさみまの月
出返しうんなるけよ
三ちもつまもんえりてみ西の月
法華寺

御熊野の南の山の澤つたに生せる蓮こけ苔
十月ゝ賀茂に籠て嘆くゝ後徳
増基法師

うきふね浮舟と白波のたゆたふこゝろ
をのゝきふるへ初瀬と
と道て坂を賀茂社よまつり参と年たく
ぬるをやとて仁安三年十月十日参り
て帰まいりすとて毎ふとの社のたく
ゝりふ法施を参り参る後木の月のく

そつゝもしに神さびおとれはあるえ結け
西行法師
日吉社より前方を参りけるに
かゝこまゝ山そに海のふかきこゝろおもに
法橋春擦
後法性寺入道前関白家百ゝ年より神祇
のんを
望月后宮大夫後成
賀茂社より後て参りける百ゝ年中に

[illegible]

前大納言忠良

熊野新宮にて

[illegible]

中原師光卿

[illegible]

[illegible]

権大僧都清季

[illegible]

[illegible]

[illegible]

角のむそよ祇乃みちにひとよ松まつふりしあるをみるにも

祇園社中に　左近大將實泰

たのりふ光と蓋ふまゝ(法)に(師)とあつて(て)四つの祇

園社と　從三位為實

ま〳〵きこえそめむ葛とゝ(ゝ)ふ(ふ)毎山ゝ老ゝ(ゝ)ふ(ふ)ら(ら)

ゆ　前大僧正慈鎮

立ゆく世と思ふや祇園やかんをまそはのすゑ(ゑ)ふ(ふ)る